（様式1）

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

研究進捗状況報告書の概要

1 研究プロジェクト

学校法人名	学校法人 専修大学	大学名	専修大学
研究プロジェクト名	アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの構築		
研究観点	研究拠点を形成する研究		

2 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本研究プロジェクトの目的は、(1) 東アジアおよび東南アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイングの現状と規定要因を、調査票（アンケート）「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」によって明らかにするとともに、(2) この地域の大学・研究機関からなる国際的な研究コンソーシアムを構築し、将来にわたって協働的に研究するためのプラットフォームを形成することである。

ウェルビーイング（幸福）あるいは生活の質は、アリストテレス以来の社会科学における中心的なテーマのひとつである。ウェルビーイングは、単に個々人の社会経済的地位にのみ関係するものではなく、社会関係や社会体制によっても影響される。したがって、この研究プロジェクトでは、単なる個人的なウェルビーイングではなく、社会的なウェルビーイングを対象にし、学際的なアプローチによって、理論と実証の両面からその姿を明らかにする。

東アジアおよび東南アジアは、このテーマを研究する際に重要な地域である。第1に、この地域はきわめて多様である。第2に、この地域は現在でも、伝統的な生活スタイル・価値観を色濃く残している。第3に、この地域は、20世紀中葉以降、急速な経済発展・都市化を遂げた。第4に、この地域では、少子高齢化という先進国共通の課題も抱えている。

こうした諸課題を抱える東アジアおよび東南アジアを対象に、ソーシャル・ウェルビーイング研究を進めることは、学術的にユニークであるだけでなく、この成果を各国・地域やグローバル社会に提示できれば、各種政策面での貢献も大きいであろう。

研究体制の特徴は、海外の共同研究者・機関グループを研究コンソーシアムメンバーとして位置づけていることである。現在は、7か国36名（ベトナム6名、タイ5名、韓国7名、フィリピン6名、インドネシア6名、中国1名、台湾5名）に及んでいる。

3 研究プロジェクトの進捗及び成果の概要

アンケート調査「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」を、日本（平成27年2月）、韓国（27年初秋）、ベトナム（27年晩秋）、フィリピン（28年初秋）、タイ（28年晩秋）、インドネシア（29年度）、台湾（29年度）で実施（予定）した。

海外のコンソーシアム機関と共催する国際コンファレンスは、第1回（平成29年3月）はタイのチュラロンコン大学で、以後、ベトナム社会科学院（29年10月）、インドネシア国立大学（30年2月）、ソウル国立大学（30年秋）などで順次開催される予定である。これによって、アジアにおける研究コンソーシアムの構築が、具体的かつ継続的なものとなるであろう。

英語論集 *The Senshu Social Well-being Review* では、外部からの投稿を積極的に進める観点から、平成28年度後半の時点で、投稿規定を明確にして、ソーシャル・ウェルビーイング研究の国際的なプラットフォームになることを目指している。

（様式１）

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

平成 26 年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究進捗状況報告書

１　学校法人名　学校法人　専修大学　　　２　大学名　専修大学

３　研究組織名　専修大学社会知性開発研究センター/ｿｰｼｬﾙ･ｳｪﾙﾋﾞｰｲﾝｸﾞ研究センター

４　プロジェクト所在地　神奈川県川崎市多摩区東三田２－１－１

５　研究プロジェクト名　アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの構築

６　研究観点　研究拠点を形成する研究

７　研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
原田　博夫	経済学部	教授

８　プロジェクト参加研究者数　19　名

９　該当審査区分　理工・情報　　生物・医歯　　(人文・社会)

１０　研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
原田　博夫	経済学部・教授	ソーシャル・リスクマネジメント研究	研究代表：財政制度分析
嶋根　克己	人間科学部・教授	ソーシャル・キャピタル研究	研究推進責任者：葬送分析
金井　雅之	人間科学部・教授	ソーシャル・キャピタル研究	事務局長：社会調査分析
神原　　理	商学部・教授	経済・ビジネス研究	経済・ビジネス研究：チーフ ソーシャル・ビジネス分析
大橋　英夫	経済学部・教授	経済・ビジネス研究	中国・アジア経済分析
鈴木　奈穂美	経済学部・教授	経済・ビジネス研究	NPO 活動分析
大矢根　淳	人間科学部・教授	ソーシャル・リスクマネジメント研究	ソーシャル・リスクマネジメント研究：チーフ　防災社会学分析
小池　隆生	経済学部・准教授	ソーシャル・リスクマネジメント研究	雇用・社会政策分析
徐　一睿	経済学部・准教授	ソーシャル・リスクマネジメント研究	中国調査における連携・調整担当
飯沼　健子	経済学部・教授	ソーシャル・キャピタル研究	ソーシャル・キャピタル研究： チーフ　ジェンダー分析
村上　俊介	経済学部・教授	ソーシャル・キャピタル研究	市民社会分析
稲田　十一	経済学部・教授	ソーシャル・キャピタル研究	国際援助分析

（様式1）

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

（共同研究機関等）			
丸茂　雄一	専修大学兼任講師	ソーシャル・リスクマネジメント研究	集団的防衛法制分析
鷲見　英司	新潟大学准教授	ソーシャル・キャピタル研究	アンケート調査の地域経済分析
中村　虎彰	韓国・ウソン大学校ソルブリッジ国際ビジネススクール客員研究員	ソーシャル・リスクマネジメント研究	研究コンソーシアム
林　玄鎮	韓国科学アカデミー会員	日韓政治経済研究	研究コンソーシアム
ダン　グエン　アイン	ベトナム社会科学院社会学研究所・所長	アジアの移民・雇用・労働研究	研究コンソーシアム
チャン　クアン　ミン	ベトナム社会科学院東北アジア研究所・所長	東北アジアの政治・経済研究	研究コンソーシアム
スリチャイ　ワンゲーオ	タイ　チュラロンコン大学平和紛争研究所・所長	アジアの農村社会研究	研究コンソーシアム

＜研究者の変更状況（研究代表者を含む）＞

■研究者の追加

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	専修大学経済学部・准教授	徐　一睿	中国調査における連携・調整担当
	新潟大学経済学部・准教授	鷲見　英司	アンケート調査の地域経済分析

（変更の時期：平成28年　4月　1日）

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

１１　研究進捗状況（※　５枚以内で作成）

（１）研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

【研究プロジェクトの目的・意義】

ウェルビーイング（幸福）あるいは生活の質は、アリストテレス以来の社会科学における中心的なテーマのひとつである。ウェルビーイングは、単に個々人の社会経済的地位にのみ関係するものではなく、家族や近所づきあいなどの社会関係、政治制度や宗教などの社会体制によっても影響される。したがって、この研究プロジェクトでは、単なる個人的なウェルビーイングではなく、社会的なウェルビーイングを対象にするため、経済学や社会学などの社会諸科学の学際的なアプローチによって、理論と実証の両面からその姿を明らかにする。

東アジアおよび東南アジアは、このテーマを研究する際に重要な地域である。第 1 に、この地域は経済力、政治体制、民族、文化、宗教などにおいてきわめて多様である。第 2 に、この地域は近代化に歩み出す時期が遅かったため、21 世紀初頭の現在でも、伝統的な生活スタイル・価値観を色濃く残している。第 3 に、にもかかわらずこの地域は、20 世紀中葉以降急速な経済発展・都市化を遂げ、経済のグローバル化の牽引役でもある。第 4 に、さらにはこの地域では、少子高齢化という先進国共通の課題が、すでに現実のものになりつつある。にもかかわらず、従来のソーシャル・ウェルビーイング研究の大半は、主に欧米での知見を基に進められてきた。

したがって、東アジアおよび東南アジアを対象にソーシャル・ウェルビーイング研究を進めることは、普遍性と個別性を識別・抽出するという意味で学術的にユニークであるだけでなく、この成果を各国・地域やグローバル社会に提示できれば、各種政策面での貢献も大きい。

【計画の概要】

本研究プロジェクトは以下の 4 つの領域で、進んでいる。(1) 東アジアおよび東南アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイングの現状と規定要因を、調査票（アンケート）「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」によって明らかにする。調査対象国・地域は 7 つ（日本、韓国、ベトナム、フィリピン、タイ、インドネシア、台湾）に及ぶ。(2) これらのアンケート調査から得られた知見を基に、シンポジウム（日本国内での開催）およびコンファレンス（海外）を開催し、研究成果を研究者や学生、政府関係者や一般に向けて広く公開している。平成 28 年度以降は、毎年 2 回以上のペースで開催している。(3) 英文機関誌 *The Senshu Social Well-being Review* を毎年 1 回刊行し、ソーシャル・ウェルビーイングに関する最先端の研究成果を、世界の専門研究者に発信している。この機関誌は、専修大学学術機関リポジトリ（SI-Box）でもオンライン公開されているので、世界中の人が無償で閲覧できる。(4) 和文機関誌『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』も毎年 1 回刊行されている。こちらは、主に日本の大学生・大学院生と一般の人々に向けて、ソーシャル・ウェルビーイングをどのように理解し活用すればいいのかについて、わかりやすく伝えることを目的としている。この和文機関誌も無償でオンライン公開されている。

こうした活動の結果、7 つのアジア各国・地域の大学・研究機関からなる国際的な研究コンソーシアムが構築されており、将来にわたってさらにオープンで協働的に研究するためのプラットフォームの基盤が形成されている。

（２）研究組織

研究代表・原田博夫（経済学部教授）、研究推進責任者・嶋根克己（人間科学部教授）、事務局長・金井雅之（人間科学部教授）の下、「経済・ビジネス研究（チーフ・神原理＜商学部教授＞、他 2 名)」「ソーシャル・リスク・マネジメント（チーフ・大矢根淳＜人間科学部教授＞、他 5 名)」「ソーシャル・キャピタル研究（チーフ・飯沼健子＜経済学部教授＞、他 5 名)」の 3 つの緩やかなグループを構築しつつも、研究会や現地調査ではグループ横断的に取り組んでいる。本学専任教員である研究員（全 12 名）は、経済学部・商学部・人間科学部の 3 つの学部から分野横断的に構成されており、ソーシャル・ウェルビーイングという学際的なテーマに対応できる陣容になっている。また、客員研究員（全 7 名）として国内外の研究機関からさまざまな分野の研究者を迎えており、組織間連携や国際的な研究発信に寄与している。PD 及び RA については、平成 26 年度は PD 1 名・RA 1 名、平成 27 年度以降は PD 1 名の体制で、データの整理や分析等の研究業務に取り組んでいる。いずれも本学大学院の出身者であり、うち 1 名は本センターでの雇用期間中に博士学位を取得し、国際学会での報告や論文執筆を重ねるなど、若手研究者の育成という趣旨に合致した成果をあげている。研究支援体制については、社会知性開発研究センター事務課による手厚い支援により、海外研究機関との調査委託契約の取り交わしなどの煩雑な業務をスムーズに遂行できている。

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

特筆すべきは、海外の共同研究機関との提携である。本研究プロジェクトのスタート時点から 3 か国 4 名（ベトナム 2 名、タイ 1 名、韓国 1 名）の研究者が共同研究者として加わっていたが、国際比較（アンケート）調査を行う海外の大学・研究機関のメンバーも含めた共同研究者ネットワークが順次形成でき、現在は、7 か国 36 名（ベトナム 6 名、タイ 5 名、韓国 7 名、フィリピン 6 名、インドネシア 6 名、中国 1 名、台湾 5 名）に拡充している。これらの海外共同研究機関とは調査の実施だけでなく、英語論集の編集に International Advisory Board として助言をいただいたり、現地で国際コンファレンスを開催していただくなど、さまざまな面での研究交流を深化させている。

（３）研究施設・設備等

研究施設の面積及び使用人数　　使用者数 19 名
社会知性開発研究センター事務課（生田校舎 3 号館 1 階）　　面積 93 ㎡
社会知性開発研究センター2（生田校舎 3 号館 1 階）　　面積 24 ㎡

（４）進捗状況・研究成果等　※下記、13及び14に対応する成果には下線及び＊を付すこと。

＜現在までの進捗状況及び達成度＞

平成 26 年度は、先行研究プロジェクト（文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業、平成 21 年度～25 年度）である社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）研究センターでの研究成果を踏まえて、本テーマに関する海外の先行研究者 1 名を招いてのシンポジウム「ソーシャル・ウェルビーイングと経済発展」（平成 26 年 12 月 6 日）　**＊1**を行い、幅広の意見交換を図った。年度後半は、調査票（アンケート）「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」の項目・内容を固めるために、相当数の研究会を行い、平成 27 年 2 月に日本で、ウェブ調査（サンプルサイズは約 12,000）を実施するに至った。これが、その後の海外でのアンケート調査の雛型となる。

平成 27 年度は、国内の先行研究者 2 名を招いてのシンポジウム「「幸福」をつくる政策」（平成 27 年 11 月 28 日　**＊2**、日本経済研究センターと星槎大学が後援）を行い、本研究プロジェクトの特色を確認した。また、調査票（アンケート）「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」を、韓国（平成 27 年初秋）とベトナム（平成 27 年晩秋）で実施した。さらに、海外での調査結果も確認するためのプロジェクトセミナー（平成 28 年 2 月 17 日～19 日）を専修大学富士山中湖セミナーハウスで行い、海外からの参加者（5 か国 8 名）とのソーシャル・ウェルビーイング研究に関する情報交換を通じて、国際的な研究者同士のネットワークの輪が広がった。

平成 28 年度は、プロジェクトセミナーに引き続くシンポジウム「アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング：アンケート調査を踏まえて」（平成 28 年 6 月 25 日）　**＊3**を開催し、国際的な研究コンソーシアムの形成が確実なものとなった。こうした準備段階を経て、第 1 回国際コンファレンス「Social Well-being and Sustainable Development Goals in Asia」（チュラロンコン大学、平成 29 年 3 月 9 日・10 日）　**＊4**を、本研究プロジェクトとしては初の海外（タイ）での開催にこぎつけた。本研究プロジェクトから 5 名、海外の研究コンソーシアムメンバー11 名に加えて、東南アジア諸地域の国際機関・政府関係者等 8 名も参加し、文字通り、本テーマの現代性・地域性を反映したのもとなった。後援機関には、アジア開発銀行研究所（Asia Development Bank Institute）、日本経済研究センターになっていただいた。

この、海外のコンソーシアムメンバー機関と共催する国際コンファレンスは、以後、ベトナム、インドネシア、韓国などで、順次開催する予定である。

研究成果は、初年度から英語論集 *The Senshu Social Well-being Review*（No.1, March 2015　**＊5**；No.2, March 2016　**＊6**；No.3, September 2016　**＊7**）と日本語論集『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』（No.1, 2015 年 3 月　**＊8**；No.2, 2016 年 3 月　**＊9**；No.3, 2017 年 3 月　**＊10**）の形で、毎年度発表している。両論集とも、本研究プロジェクトの研究成果・活動状況を取りまとめて外部に情報発信するだけでなく、ソーシャル・ウェルビーイング研究に関連した外部（とりわけ海外）からの投稿を認めており、国際的な研究プラットフォームとなることを目指している。

＜特に優れた研究成果＞

海外のコンソーシアムメンバー機関と共催する国際コンファレンスは、第 1 回（平成 29 年 3 月）はタイのチュラロンコン大学で開催されたが、以後、ベトナム社会科学院（平成 29 年 10 月）、インドネシア国立大学（平成 30 年 2 月）、ソウル国立大学（平成 30 年秋）などで、順次開催される予定である。これによって、アジアにおける研究コンソーシアムの構築が、具体的かつ継続的なものとなることが明確になった。

英語論集 *The Senshu Social Well-being Review* と日本語論集『ソーシャル・ウェルビーイング研究

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

論集』では、外部からの投稿を積極的に進める観点から、平成 28 年度後半の時点で、投稿規定を明確にして（英語論集については American Sociological Association の Style Gide 第 5 版（2014）に準拠、日本語論集については日本社会学会の社会学評論スタイルガイド第 2 版（2009）に準拠)、両論集がソーシャル・ウェルビーイング研究のプラットフォームとなることを目指している。とりわけ、英語論集に関しては、2017 ISA (International Sociological Association) RC55 (Social Indicator) Mid-term Conference（台湾台北・中央研究院、2017 年 4 月 21 日・22 日）での優秀論文・発表から数点を選抜して、「特集」として掲載する予定である。

＜問題点とその克服方法＞
英語論集 *The Senshu Social Well-being Review* への投稿論文が増えた場合、それをどのように審査すべきかについては、論集の学術的なレベルアップのために、重要な課題だった。これについては、平成 28 年度後半に、本研究プロジェクトの海外コンソーシアムメンバーの協力で、論文の適切な受理・査読体制（ピアレビュー）が組めそうな見通しがついた。これによって、第 4 号（平成 29 年 10 月予定）以降の論集の充実を期待している。

＜研究成果の副次的効果（実用化や特許の申請など研究成果の活用の見通しを含む。）＞
研究コンソーシアムが形成されることによって、海外の大学・研究機関との交流が深まった結果、ベトナム社会科学院（平成 26 年 8 月締結）およびタイ・チュラロンコン大学（平成 28 年 3 月締結）との間で、国際交流組織間協定を締結するに至った。

＜今後の研究方針＞
本研究プロジェクトの存在を明らかにする観点から、これまでも海外で開催される学会・国際大会には積極的に参加してきたが、今後は、調査票（アンケート）「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」の各国での結果を（すでに調査済みは日本＜平成 27 年 2 月＞、韓国＜平成 27 年 10 月＞、ベトナム＜平成 27 年 12 月＞、フィリピン＜平成 28 年 11 月＞、タイ＜平成 28 年 12 月＞で、今後はインドネシア＜平成 29 年 8 月＞、台湾＜平成 29 年 8 月＞などの計画)、できるだけ比較・参照できる形に取りまとめて提示する予定である。

そうした場として、アジア・欧米で開催される国際会議は非常に有効な機会だと考えている。本研究プロジェクトメンバーが個別的に参加するだけでなく、できるだけ、海外メンバーも含めた研究コンソーシアムとしてのセッションを提案して参加する方向性・可能性を探りたい。具体的には、ISA (International Sociological Association) の第 19 回世界社会学会議（2018 年）や ISQOLS (International Society for Quality-of-life Studies) の第 16 回年次大会（2018 年）などへの参加を検討している。

また、最終年度の平成 30 年度晩秋には、専修大学でシンポジウムを開催し、海外の研究コンソーシアムメンバーにもできるだけ多数参加してもらって、研究成果を持ち寄り、発表し、一般公開する予定である。

＜今後期待される研究成果＞
本研究プロジェクト期間内（平成 26 年度～平成 30 年度）に調査票（アンケート）「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」がアジア各国・地域（日本、韓国、ベトナム、フィリピン、タイ、インドネシア、台湾など）で各研究コンソーシアムメンバー・機関の協力で実施されれば、本研究プロジェクトのテーマ「アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの構築」は達成されたと考える。

この調査結果・データ利用は、本研究プロジェクト期間内は、研究コンソーシアムメンバーでの共有化に限定しているが、期間終了後は、広く外部・グローバルにも公開し、情報・知見の共有化と社会への浸透を考えている。

さらに、英語論集 *The Senshu Social Well-being Review* も、ソーシャル・ウェルビーイング研究のプラットフォームとして、研究コンソーシアムメンバーに限定されない学術研究の基盤を提供できるものと期待している。

＜自己評価の実施結果及び対応状況＞
本研究プロジェクトは、専修大学内では、社会知性開発研究センター（センター長は学長）内の一拠点と位置付けられていて、その活動は年間を通して、社会知性開発研究センター運営委員会で報告・チェックされている。社会知性開発研究センター運営委員会には、年度初めには事業計画書を、年度末には

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

自己点検評価報告書を提示している。年度中にも、6～7回の委員会が開催されて、その都度の事業活動を報告している。

さらに、この社会知性開発研究センターの活動それ自体も、全学的な自己点検評価委員会で、報告・チェックを受けている。

大学基準協会の評価（平成26年度）では、この社会知性開発研究センターの活動は、「長所として特記すべき事項」として評価されている。

＜外部（第三者）評価の実施結果及び対応状況＞

平成29年2月に実施した外部（第三者）評価では、3名の評価者のいずれからも総合所見A（目標を大きく上回っている）をいただいた。特に、国際比較調査（アンケート）が着実に進んでいること、その結果として、海外の大学・研究機関とのコンソーシアムが形成されつつあることなどが、高く評価された。国際学会での積極的な発表なども評価されている。

ただ、予定されている国際比較調査（アンケート）がまだ完了していないことなどから（日本は平成26年度、韓国・ベトナムは平成27年度、フィリピン・タイは平成28年度に実施済みだが、インドネシア・台湾は平成29年度に実施予定)、真の意味での国際比較分析にはまだ至っていないことは、今後の課題である。また、そうした分析結果を、できるだけ国際的雑誌で公表することを期待されているので、鋭意努力したい。

12　キーワード（当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。）

（1）ソーシャル・ウェルビーイング　（2）ハピネス（幸福）　（3）アジア
（4）ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）　（5）QOL（生活の質）
（6）BLI（ベター・ライフ・インデックス）
（7）コミュニティ（地域社会）　（8）ワーク・ライフ・バランス

（様式1）

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

13　研究発表の状況（研究論文等公表状況。印刷中も含む。）
上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには＊を付すこと。
＜雑誌論文＞

◎英語論文：　著者名, 刊行年, タイトル, *掲載誌名*, 巻（号）, 該当ページ.
◎日本語論文：　著者名, 刊行年, タイトル, 『掲載誌名』 機関名, 巻（号）, 該当ページ.
◎氏名の下線は当センター研究員および国内外コンソーシアムメンバーを示す。
◎通し番号と著者名の間の「**＊番号**」は、11（4）に対応する研究成果を示す。

1. **＊5** Harada, Hiroo, 2015, The Great East Japan Earthquake and Fiscal Measures, *The Senshu Social Well-being Review* 1, pp. 45-68. ［査読有］
2. **＊5** Harada, Hiroo, 2015, Raising Issues at the International Symposium 2014, *The Senshu Social Well-being Review* 1, pp.11-22. ［査読有］
3. **＊6** Harada, Hiroo, 2016, The Significance and Availability of Happiness Study, *The Senshu Social Well-being Review* 2, pp.9-39. ［査読有］
4. **＊7** Harada, Hiroo, 2016, Happiness in Japan: From the Viewpoint of Age, Sex and Relative Wealthiness, *The Senshu Social Well-being Review* 3, pp.1-17. ［査読有］
5. Iinuma, Takeko, 2015, Civicness in Question: The Case of Women's Activities in Rural Vietnam., 『専修大学社会科学研究所月報』*The Monthly Bulletin of Social Science* 624, pp. 19-37.
6. Inada, Juichi, 2015, Social Safety Net (SSN) in Vietnam: Comparative Analysis of Two Villages in the North and South in Terms of Community-Based Social Safety Net and the Market Economy Wave, 『専修大学社会科学研究所月報』*The Monthly Bulletin of Social Science* 624, pp. 38-54. ［査読有］
7. **＊5** Kambara, Satoshi, 2015, Community Changes and Social Capital: Organizing Issues Based on Previous Studies, *The Senshu Social Well-being Review* 1, pp.127-143. ［査読有］
8. **＊5** Kambara, Satoshi, 2015, The Citizens' Perception of Community in Kawasaki City Centered around Community Association Members: Result of Questionnaire Survey Conducted through Voluntary Organizations for Disaster Management, *The Senshu Social Well-being Review* 1, pp. 105-125. ［査読有］
9. **＊6** Kanai, Masayuki, 2016, Contextual Effects of Bridging Social Capital on Subjective Well-being, *The Senshu Social Well-being Review* 2, pp.41-50. ［査読有］
10. **＊7** Koo, Hearan, Jaeyeol Yee, Eun Young Nam, and Ee Sun Kim, 2016, Dimensions of Social Well-being and Determinants in Korea: Personal, Relational, and Societal Aspects, *The Senshu Social Well-being Review* 3, pp.37-58. ［査読有］
11. **＊5** Marumo, Yuichi and Satoshi Kambara, 2015, The Citizens' Perception of Community and Local Capabilities for Disaster Management in Kawasaki-shi: Result of Web-Based Questionnaire Analysis, *The Senshu Social Well-being Review* 1, pp. 69-104. ［査読有］
12. **＊6** Marumo, Yuichi, 2016, Empirical Analysis of Community Bonding Social Capital—Impacts in Emergency and Normal Times in Japan—, *The Senshu Social Well-being Review* 2, pp.51-83. ［査読有］
13. **＊7** Marumo, Yuichi, 2016, Visualization of Cognitive Process about Income Gap in Japan: Model Constructions Using SEM and Mutual Relations among Respondents' Attributes, *The Senshu Social Well-being Review* 3, pp.19-36. ［査読有］
14. **＊5** Murakami, Shunsuke, 2015, The Social Capital of Vietnamese People in Germany, *The Senshu Social Well-being Review* 1, pp. 159-186. ［査読有］

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

15. ＊5　Murakami, Shunsuke, 2015, Introduction for discussion with Thai Colleagues Commentary on Social Capital in Thailand: Unraveling the Myths of Rural-Urban Divide, *The Senshu Social Well-being Review* 1, pp.189-190 pp.191-193. ［査読有］
16. Ohashi, Hideo, 2015, China's External Economic Policy in Shifting Development Pattern, *Public Policy Review* 11(1), pp. 141-173. ［査読有］
17. ＊7　Oyane, Jun, 2016, Community Reconstruction from Flooding in Quang Phuoc Commune, Central Vietnam, *The Senshu Social Well-being Review* 3, pp.111-145. ［査読有］
18. ＊5　Phuong, Dang Thi Viet, 2015, Social Exchange and the Participation of Voluntary Associations in Lifecycle Events, *The Senshu Social Well-being Review* 1, pp.145-155. ［査読有］
19. ＊5　Schneider, Friedrich, 2015, GDP, Well-being, Happiness and the Shadow Economy: Some Results for Japan, *The Senshu Social Well-being Review* 1, pp.23-42. ［査読有］
20. Shimane, Katsumi, 2014, Funeral Ceremony as an Embedded Social Capital, 『専修大学社会科学研究所月報』*The Monthly Bulletin of Social Science* 613, pp.43-56.
21. ＊7　Sujatmiko, Iwan Gardono, Indera Ratna Irawati Pattinasarany, Ganda Upaya, and Risa Wardatun Nihayah, 2016, Social Well-being Research and Policy in Indonesia, *The Senshu Social Well-being Review* 3, pp.75-92. ［査読有］
22. ＊6　Sumi, Eiji, 2016, Subjective Well-being and Income Inequality, *The Senshu Social Well-being Review* 2, pp.85-98. ［査読有］
23. ＊7　Suzuki, Naomi, 2016, History and Forthcoming Challenges of Family Care Leave Related Systems in Japan, *The Senshu Social Well-being Review* 3, pp.147-181. ［査読有］
24. ＊7　Wirutomo, Paulus , 2016, Dealing with Brawls in Jakarta's Slum Area: Pursuing Social Development through Social Engagement., *The Senshu Social Well-being Review* 3, pp.93-109. ［査読有］
25. ＊5　Wun'Gaeo, Surichai, Surangrut Jumnianpol, Sayamol Charoenratana, and Nithi Nuangjamnong, 2015, Reply to Murakami's Commentary on "Social Capital in Thailand: Unraveling the Myths of Rural-Urban Divide", *The Senshu Social Well-being Review* 1, pp.195-197. ［査読有］
26. ＊6　Yazaki, Keitaro, 2016, Basic Descriptive Statistics of Japan Social Well-being Survey, *The Senshu Social Well-being Review* 2, pp.99-109. ［査読有］
27. ＊7　Yee, Jaeyeol, Hyun-Chin Lim, Eun Young Nam, Do-Kyun Kim, and Ee Sun Kim, 2016, Survey Design and Descriptive Outcomes of Korean Survey, *The Senshu Social Well-being Review* 3, pp.59-74. ［査読有］
28. 傅恒・張 光雲, 2015, 論兼具「法条競合与想象競合色彩」的個案之処断原則, 『西南民族大学学報』 2015(8), pp.106-111. ［査読有］
29. 飯沼 健子, 2014, 飯田・下伊那における地域規模と地域振興, 『専修大学社会科学研究所月報』 611・612, pp. 98-109.
30. 飯沼 健子, 2017, 地域統合下のタイ・ラオス・ベトナム国境地域の連結性, 『専修大学社会科学研究所月報』 642・643, pp. 26-41.
31. ＊9　稲田 十一, 2016, ベトナムにおけるソーシャル・セーフティネット（SSN)－「共同体的扶助制度」と「市場化の波」の南北比較-, 『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』 2, pp.55-73. ［査読有］
32. 大崎 裕子・坂野 達郎, 2016, 道徳的信頼の形成における制度的公正と社会的平等の役割, 『計画行政』 日本計画行政学会 39(2), pp.56-64. ［査読有］
33. 大橋 英夫, 2014, 転換期の中国経済における「2 つの罠」,『Erina report』環日本海経済研究所 117, pp. 41-44.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

34. 大橋 英夫, 2014, 発展方式の転換と対外経済政策(特集 中国 : 新指導部における経済政策を中心に), 『フィナンシャル・レビュー』 財務省財務総合政策研究所 119, pp. 112-135. ［査読有］
35. 大橋 英夫, 2016, 新常態下の中国経済, 『東亜』 霞山会 584, pp. 10-18.
36. 大橋 英夫, 2016, TPP と中国の「一帯一路」構想, 『国際問題』 日本国際問題研究所 652, pp. 29-39.
37. 大橋 英夫, 2016, 中国の改革開放からみた自由貿易試験区, 『アジ研ワールド・トレンド』 アジア経済研究所 249, pp. 8-11.
38. 大矢根 淳, 2014, 地域レジリエンスの向上と事前復興, 『労働の科学』 労働科学研究所 69(4), pp. 206-209.
39. 大矢根 淳, 2014, 書評 田中重好 高橋誠 イルファン・ジックリ著『大津波を生き抜く』(明石書店・2012 年), 『地域社会学会年報』 26, pp. 163-164.
40. 大矢根 淳, 2016, サステナブル(sustainable)な防災社会構築のための新基軸〜コミュニティにおけるレジリエント(resilient)な取組事例をめぐって〜, 『専修大学社会科学研究所月報』 641, pp. 3-13.
41. 大矢根 淳, 2017, 被災地ローカル各紙統合スクラップ帳の意義と課題－復興ロジックの探索・再構築に向けて－, 『法学研究』, in press.
42. 大矢根 淳, 2017, ベトナム中部村落における水害からの復興の履歴と枠組み, 『専修人間科学論集』 7, in press.
43. 小笠原 強・宮川 英一, 2016, 関東大震災時の中国人虐殺資料を読む（二）―中央研究院近代史研究所所蔵『日本震災惨殺華僑案』第四冊―, 『専修史学』 61, p.63, pp.80-120.
44. ＊8 金井 雅之, 2016, ソーシャル・ウェルビーイング研究の課題, 『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』 1, pp.7-22. ［査読有］
45. ＊10 金井 雅之, 2017, 日本・韓国・ベトナムにおける幸福度の比較―ソーシャル・ウェルビーイング研究の現場から (1)―, 『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』 3, pp. 53-67. ［査読有］
46. 神原 理, 2015, 地域活動におけるブレインストーミングの活用方法：創造的な思考と関係性を生み出すための手法, 『専修商学論集』 100, pp. 93-105.
47. 神原 理・中間 大維, 2015, 社会的消費に関する意識調査：Web アンケートの分析結果(商学部創立 50 周年記念号), 『専修商学論集』 101, pp.101-116.
48. ＊8 神原 理, 2016, 川崎市民の地域意識と生活満足度, 『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』 1, pp.23-38. ［査読有］
49. 神原 理, 2014 年, 川崎市における市民のコミュニティ意識とソーシャル・キャピタル(特集 社会開発と公益), 『公益学研究』 日本公益学会 14(1), pp.11-22. ［査読有］
50. 小池 隆生, 2016, 拡大する高齢者の貧困, 『ゆたかなくらし』 全国老人福祉問題協議会 405, pp.6-9.
51. ＊9 小塩 隆士, 2016, ソーシャル・キャピタルと幸福度-理解をさらに深めるために, 『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』 2, pp.19-33. ［査読有］
52. 嶋根 克己, 2015, 失われる記憶と編集される記憶――ユダヤ人虐殺にかかわる展示から, 『日仏社会学会年報』 26, pp.17-32. ［査読有］
53. 嶋根 克己, 2016, 書評 森謙二著『墓と葬送の社会史』『墓と葬送のゆくえ』(吉川弘文堂・2014 年), 『法社会学』 日本法社会学会 82, pp.282-289. ［査読有］
54. 嶋根 克己, 2016, 近代化する葬儀の諸課題：ベトナムと日本の比較から, 『専修大学社会科学研究所月報』641, pp.23-33.
55. 嶋根 克己, 2017, Katu 族の棺, 『専修大学社会科学研究所月報』 642, pp.51-56.
56. 徐 一睿, 2015, 「一帯一路」からみる中国国内における地域政策の変化と財政的課題:ローカルハブの構築に向けて, 『Erina report』 環日本海経済研究所 127, pp. 53-62.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

57. 徐 一睿, 2016, 平成大合併に対する再考:長野県小川村を事例に,『専修大学社会科学研究所月報』 630・631, pp.630-631.
58. ＊9 白石 小百合・白石 賢, 2016, 幸福の経済学-現状と課題から次のステップへ,『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』 2, pp.35-53. ［査読有］
59. 鷲見 英司, 2015, 地方財政健全化法下での地方自治体の財政健全化行動の実証分析,『日本地方財政学会研究叢書』 22, pp.130-156. ［査読有］
60. 鷲見 英司, 2016, 地方財政健全化法による地方自治体の効率化効果に関する実証分析,『日本地方財政学会研究叢書』 23, pp.31-54. ［査読有］
61. 張 光雲, 2016, 中国における DV 法的規制と DV 反撃殺傷行為の刑事法上の課題,『日本法學』 日本大学法学会 82(2), pp.493-533. ［査読有］
62. 中島 正裕・川副 早央里・塩田 光・大矢根 淳, 2015, 宮城県石巻市における仮設住宅団地の生活実態－東日本大震災発生から１年半後のコミュニティに着目して－,『農村計画学会誌』 34(2), pp. 167-176.
63. 原田 博夫, 2014, 幸福感と社会関係資本 特集:「幸福度」再考,『計画行政』日本計画行政学会 37(2), pp.23-28. ［依頼論文］
64. ＊9 原田 博夫, 2016, 「幸福」研究の意義と可能性,『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』 2, pp.7-18. ［査読有］
65. ＊10 原田 博夫訳, 2017, フリードリッヒ・シュナイダー著 GDP, ウェルビーイング, 幸福とシャドーエコノミー―日本についての考察―,『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』 3, pp. 33-51. ［査読有］
66. 丸茂 雄一, 2017, 日本人の生活満足度の決定要因に関する実証的分析,『公益学研究』 日本公益学会 16(1), pp.21-30.
67. 宮下 量久・鷲見 英司, 2016, 地方交付税の合併算定替と合併自治体の効率性に関するパネル・データ分析,『財政研究』 日本財政学会 12, pp.170-186. ［査読有］
68. 宮下 量久・鷲見 英司, 2017, 合併自治体の財政調整基金に関する実証分析,『日本地方財政学会研究叢書』24, in press. ［査読有］
69. 村上 俊介, 2015, 望月市民社会論再考,『専修大学社会科学研究所月報』 620, pp. 1-29.
70. 村上 俊介, 2015, 社会科学研究所 2014 年度春季合宿研究会（ベトナム南部・中部）行程,『専修大学社会科学研究所月報』 625・626, pp.1-11.
71. 村上 俊介, 2016, 古代日本史における「史観」の変遷-百舌鳥・古市古墳群を歩いて一,『専修大学社会科学研究所月報』 637・638, pp.59-75.
72. 村上 俊介, 2016, 日本におけるベトナム研究の視座の変遷,『専修大学社会科学研究所月報』 641, pp.14-22.
73. 村上 俊介, 2017, 経済発展（開発）の中のベトナム中央高原,『専修大学社会科学研究所月報』642, pp. 90-99.
74. ＊8 矢崎 慶太郎, 2016, ウェルビーイングの一指標としての芸術,『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』 1, pp.51-61. ［査読有］
75. ＊10 矢崎 慶太郎, 2017, 信頼：社会学の基礎前提とソーシャル・ウェルビーイング調査結果の検討,『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』 3, pp. 9-31. ［査読有］
76. 山崎 義広・鷲見 英司・長尾 雅信, 2015, 小千谷市民による地域・コミュニティ評価に関する分析,『新潟大学経済論集』 99, pp.143-158.
77. ＊8 李栄・宮川 英一訳, 2015, 中国における幸福感の研究状況,『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』 1, pp. 39-47. ［査読有］
78. 原田 博夫, 2017, ダナン市の経済開発と外資導入,『専修大学社会科学研究所月報』 642・643, R79.

（様式1）

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

＜図書＞

◎書籍の著・編・訳の場合
著者 or 編者 or 訳者, 刊行年, 著者 or 編者 or 訳者『書籍タイトル』, 出版社名
◎編集書中の特定章の著・編・訳を担当している場合
著者 or 編者 or 訳者, 刊行年, 著者 or 編者 or 訳者『書籍タイトル』, 対象章番号「タイトル」, 出版社名
＊日本語以外の図書の場合、書籍タイトルをイタリック体、章タイトルをアポストロフィー内にて記載。
◎氏名の下線は当センター研究員および国内外コンソーシアムメンバーを示す。

1. Harada, Hiroo, 2015, Mazzoleni, Gianpietro ed., *The International Encyclopedia of Political Communication*, Public Choice, Wiley Blackwell Books. ［査読有］
2. Ohashi, Hideo, 2015, Hirai, Toshiaki ed., *Capitalism and the World Economy: The Light and Shadow of Globalization*, 13 "A Mixed Effect of Globalization on China's Economic Growth", Routledge. ［査読有］
3. Shimane, Katsumi, 2014, *Quan hệ Việt Nam- Nhật Bản 40 năm nhìn lại và định hướng tương lai*, "Xã hội vô cảm và giai đoạn cuối đời trong thời đại ít trẻ em- già hóa dân số ở Nhật Bản", Nhà xuất bản Khoa học xã hội. ［査読有］
4. Xu, Yirui, 2016, Yamamoto,Masashi, Hosoda, Eiji eds., *The Economics of Waste Management in East Asia*, 8 "Extended official responsibility and the red card rule in China", Routledge.
5. 張 光雲訳, 2015, 日髙義博著 『違法性的基礎理論』, （中国）法律出版社.
6. 大橋 英夫, 2016, 加藤弘之・梶谷懐編 『二重の罠を超えて進む中国型資本主義―「曖昧な制度」の実証分析』, 第 11 章「中国企業の対米投資――摩擦・軋轢の争点は何か」, ミネルヴァ書房.
7. 大矢根 淳, 2014, 木村周平編 『災害フィールドワーク論』, 第 7 章「生活再建･コミュニティ復興に寄り添う―長期にわたる社会学的被災地研究―」, 古今書院.
8. 大矢根 淳, 2015, 清水展編 『新しい人間,新しい社会―復興の物語を再創造する―』（災害対応の地域研究 第 5 巻）, 第 2 章「現場で組み上げられる再生のガバナンス―既定復興を乗り越える実践例から―」, 京都大学学術出版会.
9. 大矢根 淳, 2015, 清水展編 『新しい人間,新しい社会―復興の物語を再創造する―』（災害対応の地域研究 第 5 巻）, 第 8 章「小さな浜のレジリエンス―東日本大震災･牡鹿半島小渕浜の経験から―」, 京都大学学術出版会.
10. 大矢根 淳, 2017, 佐藤康一郎編 『ベトナムの経済及び産業・社会・文化の変容と諸課題』社会科学研究叢書 19, 「ベトナムの都市化と居住環境構制―ドラスティックな変容の実相を読み解く視角―」, 専修大学出版局.
11. 嶋根 克己, 2017, 佐藤康一郎編 『ベトナムの経済及び産業・社会・文化の変容と諸課題』社会科学研究叢書 19, 第 5 章｢変貌するベトナムの葬儀｣, 専修大学出版局.
12. 徐 一睿, 2016, 大西広他 『中成長を模索する中国「新常態」への政治と経済の揺らぎ』,

    第 2 章「地方統制―政治選抜トーナメント方式について」と第三章「地方財政の土地開発利益依存と脱却への模索」, 慶應義塾大学出版会.
13. 張 光雲, 2014, 板倉宏監修 『現代の判例と刑法理論の展開』, 17 「窃盗罪の実行の着手」, 八千代出版.

    ［査読有］
14. 村上 俊介, 2017, 佐藤康一郎編 『ベトナムの経済及び産業・社会・文化の変容と諸課題』社会科学研究叢書 19, 第 8 章「ドイツのベトナム人 旧東ドイツの契約労働者たちの軌跡」, 専修大学出版局.
15. 矢崎 慶太郎, 2016, 『抑圧と余暇のはざまで：芸術社会学の視座と後期東ドイツ文学』, 専修大学出版局.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

＜学会発表＞

◎発表者，発表年，学会名，開催場所
◎氏名の下線は当センター研究員および国内外コンソーシアムメンバーを示す。
◎通し番号と著者名の間の「**＊番号**」は、11（4）に対応する研究成果を示す。

1. ＊3 Anh, Dang Nguyen, 2016, Social Well-being in Vietnam: Level and Determinants, 2016 Symposium of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being in Asia: Empirical Evidences and Theoretical Perspective", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Senshu University Satellite Campus.
2. Harada, Hiroo, 2014, Social Well-Being/Capital in Asia: From the Questionnaire Approach in Well-being and Quality of Life in Asia (2), 2014 ANPOR Annual Conference Asian Network for Public Opinion Research, 新潟市朱鷺メッセ Toki Messe Niigata. ［査読有］
3. Harada, Hiroo, 2014, Social Capital of Seven Countries/Areas in East Asia: From the Questionnaire Approach," with others in Current Research in Rational Choice Theory at RC45 Poster session, XVIII ISA (International Sociological Association) World Congress of Sociology, Yokohama. ［査読有］
4. Harada, Hiroo, 2015, D4 session: Social Well-being/Capital in East Asia: From the Questionnaire Method, Moderator and Presenter, Comparison of Social Well-being/Capital in East Asia, 9th ISTR (International Society for Third-sector Research) Asia Pacific Conference, Tokyo (Japan) Nihon University Suidobashi Campus. ［査読有］
5. ＊3 Harada, Hiroo, 2016, Organizer, 2016 Symposium of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being in Asia: Empirical Evidences and Theoretical Perspective", 2016 Symposium of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being in Asia: Empirical Evidences and Theoretical Perspective", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Senshu University Satellite Campus.
6. ＊3 Harada, Hiroo, Yasuhiro Tanaka, and Eiji Sumi, 2016, Social Well-being in Japan: Analysis from Relative Income Hypothesis, 2016 Symposium of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being in Asia: Empirical Evidences and Theoretical Perspective", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Senshu University Satellite Campus.
7. Harada, Hiroo, 2016, Social Well-being in Japan: From the Viewpoint of Age, Sex, Residence and Relative Wealthiness of A Questionnaire Survey, The 15th International Conference of the Japan Economic Policy Association (JEPA), Onuma International Seminar House. ［査読有］
8. Harada, Hiroo, 2016, Happiness in Japan: From the Viewpoint of Age, Sex and Relative Wealthiness, 3rd ISA Forum of Sociology, Vienna (Austria). ［査読有］
9. Harada, Hiroo, 2016, Social Well-being in Japan: From the Viewpoint of Age, Sex and Relative Wealthiness of a Survey, 24th World Congress of Political Science, Poznań (Poland). ［査読有］
10. ＊4 Harada, Hiroo and Surichai Wun'gaeo, 2017, Social Well-being and Multi-level Learning in East and Southeast Asia, 2017 The First Conference of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being and Sustainable Development Goals in Asia", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Chulalongkorn University.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

11. ＊4 Iinuma, Takeko, 2017, Social Well-being in Japan, Korea, and Vietnam: A Gender Perspective, 2017 The First Conference of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being and Sustainable Development Goals in Asia", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Chulalongkorn University.
12. ＊4 Inada, Juichi, 2017, Post-conflict Development and Social Well-being: A Comparative Study of Cambodia and Timor Leste, 2017 The First Conference of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being and Sustainable Development Goals in Asia", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Chulalongkorn University.
13. Inada, Juichi, 2015, Perception of Risks and Social Safety Net in East Asia: Cases of Indochina Countries , シンポジウム「東アジア地域協力の新地平：複合リスクを如何に乗り越えるか」, 日本国際フォーラム、グローバル・フォーラム、シンガポール大学東アジア研究所、インドネシア大学国際関係学部共催、 東京. ［招待講演］
14. ＊4 Jumnianpol, Surangrut, 2017, Reports on 2016 Social Well-being Survey in Thailand, 2017 The First Conference of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being and Sustainable Development Goals in Asia", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Chulalongkorn University.
15. Kambara, Satoshi, 2014, Community Awareness and Life Satisfaction of Citizens in Kawasaki City, 2014 ANPOR Annual Conference, 新潟市朱鷺メッセ Toki Messe Niigata. ［査読有］
16. Kanai, Masayuki, 2014, Social Network, Family Policy, and Fertility Decision, 2014 ANPOR Annual Conference, 新潟市朱鷺メッセ Toki Messe Niigata. ［査読有］
17. Kanai, Masayuki, 2015, What Type of Civil Engagement and Trust Contributes to Subjective Well-being? : The Linkage between Social Capital and Social Well-being, 9th ISTR (International Society for Third-sector Research) Asia Pacific Conference, Tokyo (Japan) Nihon University Suidobashi Campus. ［査読有］
18. ＊3 Kanai, Masayuki, 2016, Survey Design and Descriptive Outcomes of Japanese Survey, 2016 Symposium of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being in Asia: Empirical Evidences and Theoretical Perspective", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Senshu University Satellite Campus.
19. Kanai, Masayuki, 2016, Who is the Reference Point in Judging One's Well-being?: Comparison between Three Types of Relative Deprivation Measure, the 6th Joint Japan-US Conference on Mathematical Sociology and Rational Choice, Seattle（USA）. ［査読有］
20. Kanai, Masayuki, 2016, The Effect of Perceived Relative Income on Subjective Well-being Compared to Objective Income, 9th INAS Conference, Utrecht (Netherlands). ［査読有］
21. Kanai, Masayuki, 2016, Coexisting Mechanisms from Bonding/Bridging Social Capital to Subjective Well-being, 3rd ISA Forum of Sociology, Vienna (Austria). ［査読有］
22. Kanai, Masayuki, 2016, Perception of Inequality and Social Well-being, 24th World Congress of Political Science, Poznań (Poland). ［査読有］
23. Kanai, Masayuki, 2016, Dual Deprivation of Well-being by One's Origin: The Effect of Three Kinds of Relative Deprivations on Subjective Well-being, ISA RC28 Summer Meeting, Bern(Switzerland). ［査読有］

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

24. ＊4 Kim, Seokho and Jaeun Lim, 2017, Patterns of Social Support Networks in Korea, Japan and Vietnam, 2017 The First Conference of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being and Sustainable Development Goals in Asia", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Chulalongkorn University.
25. ＊3 Koo, Hearan, Jaeyeol Yee, Eun-Young Nam, Ee-sun Kim, 2016, Dimensions of Social Wellbeing and Determinants in Korea: Personal, Relational, and Societal Aspects, 2016 Symposium of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being in Asia: Empirical Evidences and Theoretical Perspective", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Senshu University Satellite Campus.
26. Marumo, Yuichi, 2015, Some Causal Models of Relationships between Social Well-being and Community Resilience by Structural Equation Modeling, 9th ISTR Asia Pacific Regional Conference, Tokyo (Japan). ［査読有］
27. Osaki Hiroko, Tatsuro Sakano, 2016, Institutional Conditions for the Creation of Moralistic Trust, 3rd ISA Forum of Sociology, Vienna (Austria). ［査読有］
28. Oyane, Jun , 2016, The New Standards for Building Sustainable Disaster Prevention Society (Considering on Resilient Activities in Communities), 日越国際シンポジウム（ベトナム社会科学院東北アジア研究所　主催国際交流基金　後援）Building a Sustainable Development Society : Vietnam – Japan Corporation to Ensure the Sustainable Development, ベトナム・ハノイ（ベトナム社会科学院会議室).
29. ＊3 Porio, Emma, 2016, Social Well-Being and Quality of Life in the Philippines: Trends and Patterns, 2016 Symposium of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being in Asia: Empirical Evidences and Theoretical Perspective", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Senshu University Satellite Campus.
30. ＊4 Porio, Emma and Justin See, 2017, Social Well-being in the Philippines: Indicators and Patterns, 2017 The First Conference of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being and Sustainable Development Goals in Asia", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Chulalongkorn University.
31. ＊4 Porio, Emma, 2017, SDGs and Social Well-being in Asia: Implications for Knowledge Mobilization and Monitoring Progress, 2017 The First Conference of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being and Sustainable Development Goals in Asia", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Chulalongkorn University.
32. ＊1 Schneider, Friedrich, 2014, "Well-being and the Shadow Economy", 国際シンポジウム「ソーシャル・ウェルビーイングと経済発展」 専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター, 専修大学神田校舎.
33. ＊4 Seda, Francisia SSE, 2017, Policies, Social Exclusion, and Social Wellbeing in Indonesia and Malaysia, 2017 The First Conference of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being and Sustainable Development Goals in Asia", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Chulalongkorn University.
34. Shimane, Katsumi , 2014, Social Rituals in South East Asia from the Aspect of Social Network, 2014 ANPOR Annual Conference, 新潟市朱鷺メッセ Toki Messe Niigata. ［査読有］
35. Shimane,Katsumi, Keitaro Yazaki, 2015, How the Tie with Neighborhood Weaken? : From the Aspect of Participation to Marriage and Funeral Ceremony, 9th ISTR Asia Pacific Regional Conference, Tokyo (Japan). ［査読有］

36. Shimane, Katsumi, 2016, 近代化する葬儀：ベトナムと日本の比較から, 日越国際シンポジウム（ベトナム社会科学院東北アジア研究所　主催国際交流基金　後援）Building a Sustainable Development Society : Vietnam – Japan Corporation to Ensure the Sustainable Development, ベトナム･ハノイ（ベトナム社会科学院会議室).［査読有］［招待講演］
37. ＊4　Shimane,Katsumi, 2017, The Meaning of Social Bond with the Dead: How the Asians maintain the relationship with the Invisible People?, 2017 The First Conference of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being and Sustainable Development Goals in Asia", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Chulalongkorn University.
38. ＊3　Sudjatmiko, Iwan Gardono, 2016, Social Well-being Research and Policy in Indonesia, 2016 Symposium of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being in Asia: Empirical Evidences and Theoretical Perspective", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Senshu University Satellite Campus.
39. ＊4　Sudjatmiko, Iwan Gardono, Ganda Upaya, Indera Pattinasarany, Jauharul Anwar, Adrianus Jebatu and Surya Adiptura 2017, Authoritarian State, Developmental Model and Social Welfare: A Comparative Analysis of Indonesia, Singapore and Malaysia, 2017 The First Conference of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being and Sustainable Development Goals in Asia", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Chulalongkorn University.
40. Sumi, Eiji, 2016, Subjective Well-being and Regional Characteristics, 24th World Congress of Political Science, Poznań (Poland).［査読有］
41. ＊3　Thuy, Nghiem Thi, 2016, Survey Design and Descriptive Outcomes of Vietnamese Survey, 2016 Symposium of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being in Asia: Empirical Evidences and Theoretical Perspective", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Senshu University Satellite Campus.
42. ＊3　Wirutomo, Paulus, 2016, Social Well-being: A Sociological Perspective, 2016 Symposium of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being in Asia: Empirical Evidences and Theoretical Perspective", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Senshu University Satellite Campus.
43. ＊4　Wirutomo, Paulus, Daisy Indira Jasmine and Riena Julianisa 2017, Social Well-being and Indonesian Mental Revolution, 2017 The First Conference of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being and Sustainable Development Goals in Asia", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Chulalongkorn University.
44. ＊3　Wun'gaeo, Surichai, 2016, Social Well-being Research and Policy in Thailand, 2016 Symposium of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being in Asia: Empirical Evidences and Theoretical Perspective", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Senshu University Satellite Campus.
45. Yazaki, Keitaro, 2016, Basic descriptive statistics of Japan SWB survey and gender inequality, 24th World Congress of Political Science, Poznań (Poland).［査読有］

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

46. ＊3 Yee, Jaeyeol, Hyun-Chin Lim, Eun-Young Nam, Do-Kyun Kim, Ee-Sun Kim, 2016, Survey Design and Descriptive Outcomes of Korean Survey, 2016 Symposium of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being in Asia: Empirical Evidences and Theoretical Perspective", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Senshu University Satellite Campus.
47. ＊4 Yee, Jaeyeol, Hearan Koo and Eesun Kim, 2017, Comparative Study of Social Well-being in Japan, Korea, and Vietnam, 2017 The First Conference of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being and Sustainable Development Goals in Asia", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, Chulalongkorn University.
48. ＊3 Yue, Yin, 2016, Conducting Large-Scale Survey Research in China: A Brief Introduction, as well as a pre-Report on the Preparation of SWB Survey in China, 2016 Symposium of International Consortium for Social Well-being Studies, "Social Well-being in Asia: Empirical Evidences and Theoretical Perspective", Center for Social Well-being Studies, Institute for Development of Social Intelligence,Senshu University, Senshu University Satellite Campus.
49. 張 光雲, 2016, 日本職務犯罪防控, 刑法創新論壇（第 9 期）, 四川省蜀鼎法律事務所. ［査読有］
50. 飯沼 健子, 2016, ラオス民間部門開発における教育・研修の役割, メコン地域におけるビジネス教育の実態に関する研究シンポジウム, 専修大学神田校舎.
51. ＊1 大矢根 淳, 2014, 災害からの復元力（レジリエンス）, 国際シンポジウム「ソーシャル・ウェルビーイングと経済発展」 専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター, 専修大学神田校舎.
52. 大矢根 淳, 2015, 「復興－防災」連関に参画する災害社会学の研究実践：岩手県大槌町安渡町内会における津波防災計画づくりをめぐって, 日本社会学会：東日本大震災研究交流会, 明治学院大学.
53. 大矢根 淳, 2014, 原発防災体制の構造的欠陥を乗り越えようとする減災サイクル論は成り立つか？～「UPZ･30km 圏の避難(認知行動→生活)」をめぐって～, 地域社会学会, 早稲田大学.
54. 大矢根 淳, 2016, サステナブル(sustainable)な防災社会構築のための新基軸 ～コミュニティにおけるレジリエント(resilient)な取組事例をめぐって～, ベトナム社会科学院東北アジア研究所主催(国際交流基金後援)･国際カンファレンス「持続的発展社会構築へ：持続的発展確保のためのベトナムと日本の協力」, ベトナム・ハノイ.
55. 小笠原 強・宮川 英一, 2015, 関東大震災と人災: 専修大学関東大震災史研究会の取り組みを中心に, 四川師範大学日本研究中心, 四川省成都市 四川師範大学日本研究中心.
56. 金井 雅之, 2015, 領域別不公平感の規定メカニズム再考, 数理社会学会, 久留米大学. ［査読有］
57. ＊2 金井 雅之, 2015, ソーシャル・キャピタルとソーシャル・ウェルビーイング, シンポジウム「『幸福』をつくる政策」 専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター, 専修大学神田校舎.
58. 金井 雅之, 2015, 主観的幸福度に対する橋渡し型・結束型社会関係資本の複合効果, 数理社会学会, 大阪経済大学. ［査読有］
59. ＊1 神原 理, 2014, 川崎市における市民の地域意識とソーシャル・ウェルビーイング, 国際シンポジウム「ソーシャル・ウェルビーイングと経済発展」 専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター, 専修大学神田校舎.
60. 神原 理, 2014, 川崎市における市民のコミュニティ意識とソーシャルキャピタル, 日本公益学会, 専修大学. ［査読有］

（様式1）

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

61. 神原 理, 2014, 川崎市における市民のコミュニティ意識－web 調査と自主防災組織への調査から－, 地域活性学会, 東京農業大学オホーツクキャンパス. ［査読有］
62. ＊2 小塩 隆士, 2015, ソーシャル・キャピタルと幸福度, シンポジウム「『幸福』をつくる政策」 専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター, 専修大学神田校舎.
63. ＊2 白石 小百合, 2015, 幸福度をはかる, シンポジウム「『幸福』をつくる政策」 専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター, 専修大学神田校舎.
64. ＊2 鷲見 英司, 2015, 幸福度と地域要因, シンポジウム「『幸福』をつくる政策」 専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター, 専修大学神田校舎.
65. 鷲見 英司, 2015, 大地の芸術祭と人々－プロペンシティスコアマッチング法によるソーシャルキャピタルへの効果検証－, 日本文化経済学会, 新潟市トキメッセ. ［招待講演］
66. 鷲見 英司, 2015, 首長選挙の財政運営への影響に関する実証分析, 日本公共選択学会第 19 回全国大会, 明海大学. ［査読有］
67. 鷲見 英司, 2015, 地方財政健全化法による地方自治体の効率化効果に関する実証分析, 日本地方財政学会第 23 回大会, 関東学院大学. ［査読有］
68. 原田 博夫, 2014, 「社会関係資本研究センターによる川崎市アンケート調査結果の説明」, 川崎市自主防災組織総会, 川崎市（中原区）総合福祉会館（エポック中原）.
69. ＊1 原田 博夫, 2014, 国際シンポジウム「ソーシャル・ウェルビーイングと経済発展」問題提起, 国際シンポジウム「ソーシャル・ウェルビーイングと経済発展」 専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター, 専修大学神田校舎.
70. 原田 博夫, 2014, セッション「アジアにおけるソーシャル・キャピタル／ウェルビーイング：社会意識（アンケート）調査を通じて」コーディネーター（問題提起）, 政治社会学会（ASPOS）第 5 回研究大会, 専修大学神田校舎.
71. ＊2 原田 博夫, 2015, シンポジウム「『幸福』をつくる政策」趣旨説明, シンポジウム「『幸福』をつくる政策」 専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター, 専修大学神田校舎.
72. 原田 博夫, 2015, 「ワークショップ：ニューツーリズムの可能性―災害対応教育の実践と継承―」コーディネーター, 日本計画行政学会第 38 回大会, 名古屋工業大学.
73. 原田 博夫, 2016, キャンプセミナー：主催者挨拶, 第一回ソーシャル・ウェルビーイング研究国際コンソーシアムキャンプセミナー　専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター, 専修大学富士山中湖セミナーハウス.
74. 原田 博夫, 2016, 「ソーシャル・ウェルビーイング」司会（コーディネーター）, ソーシャル・キャピタル　ワークショップ：ソーシャル・キャピタル研究における異分野間の学際的知見の共有, 日本大学（法学部 10 号館）.
75. 原田 博夫, 2016, 「ニューツーリズムにおける地域貢献の可能性」パネルセッションコーディネーター, 日本計画行政学会第 39 回大会, 関西学院大学（西宮上ヶ原キャンパス）.
76. 原田 博夫, 2017, 「日韓の幸福感：アンケート調査「ライフスタイルと価値観」から」, 統計研究会財政班研究会, アジア成長研究所（北九州市小倉）.
77. ＊1 丸茂 雄一, 2014, パス図解析から窺えるもの, 国際シンポジウム「ソーシャル・ウェルビーイングと経済発展」 専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター, 専修大学神田校舎.
78. 宮川 英一, 2016,「四川大地震」に関する日本語文献: 制度展開と住宅再建に関する研究を中心に, 四川師範大学日本研究中心主催「災後重建歴史社会学研討会」, 四川省成都市　四川師範大学日本研究中心.
79. 宮下 量久・鷲見 英司, 2015, 地方交付税の合併算定替と合併自治体の効率性に関するパネル・データ分析, 日本財政学会第 72 回大会, 中央大学. ［査読有］

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

80. 宮下 量久・鷲見 英司, 2016, 自治体合併前の積立金に関する実証分析, 日本財政学会第 73 回大会, 京都産業大学. ［査読有］
81. 宮下 量久・鷲見 英司, 2016, 地方交付税の合併算定替と合併自治体の効率性に関するパネル・データ分析, 日本地方財政学会第 24 回大会, 静岡大学. ［査読有］
82. ＊1 村上 俊介, 2014, 東南アジア諸国における社会関係資本, 国際シンポジウム「ソーシャル・ウェルビーイングと経済発展」 専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター, 専修大学神田校舎.
83. 村上 俊介, 2016, 日本におけるベトナム研究の視座の変遷, 2016 International Conference "Building a Sustainable Development Society: Vietnam-Japan Cooperation to Ensure the Sustainable Development", Hanoi (Vietnam). ［招待講演］
84. ＊2 矢崎 慶太郎, 2015, 日本調査の概要と主な知見, シンポジウム「『幸福』をつくる政策」 専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター, 専修大学神田校舎.
85. 矢崎 慶太郎, 2016, ジェンダーギャップと幸福度：労働時間と家事労働の比較から, 『ソーシャル・キャピタル ワークショップ：ソーシャル・キャピタル研究における異分野間の学際的知見の共有』, 日本大学（法学部 10 号館）.
86. 山本 耕資, 2015, 平等化政策志向の計測――具体的な程度を尋ねる調査項目の開発, 数理社会学会第 59 回大会, 久留米大学. ［査読有］
87. 山本 耕資, 2015, 政策選好を形成する価値判断基準と事実認識―なぜ時に大学進学者はより強い平等化政策を望むのか, 数理社会学会第 60 回大会, 大阪経済大学. ［査読有］
88. 山本 耕資, 2016, 連続型所得分布での近似による政策選好の把握―所得変換関数と最低所得水準, 数理社会学会第 61 回大会, 上智大学. ［査読有］
89. 山本 耕資, 2016, 所得平等化政策に関する選好の計測と分析, 数理的手法と理論に基づく計量的政治分析に関するワークショップ, 政策研究大学院大学. ［招待講演］

（様式１）

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

＜研究成果の公開状況＞（上記以外）

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等
ホームページで公開している場合には、URLを記載してください。

＜既に実施しているもの＞

Ⅰ．シンポジウム・コンファレンス・セミナー

【平成26年度】

■第1回シンポジウム

テーマ：ソーシャル・ウェルビーイングと経済発展
Social Well-being and Economic Development

日時　平成26年12月6日（土）14:00 - 17:30

場所　専修大学神田キャンパス7号館731教室（参加者41名）

内容　問題提起

原田博夫　（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター代表、大学院経済学研究科長、経済学部教授）

基調講演：“Well-being and the shadow economy”

Friedrich Schneider
（教授、オーストリア国 Johannes Kepler University of Linz）

「東南アジア諸国における社会関係資本」

村上俊介　（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター研究員、商学部教授）

「川崎市における市民の地域意識とソーシャル・ウェルビーイング」

神原理　（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター研究員、商学部教授）

「災害からの復元力（レジリエンス）」

大矢根淳
（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター研究員、人間科学部教授）

「パス図解析から窺えるもの」

丸茂雄一
（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター客員研究員、専修大学兼任講師）

質疑応答

司会・進行：金井雅之
（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター研究員、人間科学部教授）

【平成27年度】

■第2回シンポジウム

テーマ：「幸福」をつくる政策

日時　平成27年11月28日（土）12:30 – 17:40

場所　専修大学神田キャンパス7号館731教室（参加者50名）

内容　シンポジウムの趣旨と問題提起

原田博夫　（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター代表、経済学部教授）

基調講演：「ソーシャル・キャピタルと幸福度」

小塩隆士　（一橋大学経済研究所教授）

基調講演：「幸福度をはかる」

白石小百合　（横浜市立大学国際総合科学部教授）

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

「日本調査の概要と主な知見」
矢崎慶太郎　（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター、ポスト・ドクター）
「ソーシャル・キャピタルとソーシャル・ウェルビーイング」
金井雅之
（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター研究員、人間科学部教授）
「幸福度と地域要因」
鷲見英司
（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター客員研究員、新潟大学経済学部准教授）
パネル・ディスカッション
総合司会：嶋根克己
（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター研究員、人間科学部教授）

■プロジェクトセミナー
日程　平成 28 年 2 月 17（水）　～ 2 月 19 日（金）
場所　専修大学富士山中湖セミナーハウス
参加者　Jaeyeol Yee, Dang Nguyen Anh, Surichai Wun'gaeo, Vithaya Kulsomboon, Surangrut Jumnianpol, Emma Porio, Paulus Wirutomo, Iwan Gardono Sudjatmiko, 原田博夫、飯沼健子、稲田十一、金井雅之、丸茂雄一、村上俊介、大矢根淳、嶋根克己、徐一睿、田中康裕、宮川英一、矢崎慶太郎

【平成 28 年度】
■第 3 回シンポジウム
テーマ：アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング―アンケート調査を踏まえて―
Social Well-being in Asia: Empirical Evidences and Theoretical Perspectives
日時　平成 28 年 6 月 25 日（土）　9:30 – 17:00
場所　専修大学サテライトキャンパス（スタジオＡ／参加者 31 名）
内容　開会の挨拶
原田博夫　（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター代表、経済学部教授）
「日本・韓国・ベトナム調査」
金井雅之　（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター研究員、人間科学部教授）
田中康裕
（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター客員研究員、専修大学兼任講師）
Jaeyeol Yee, Hearan Koo, Ee-Sun Kim　（ソウル国立大学）
Dang Nguyen Anh, Nghiem Thi Thuy　（ベトナム社会科学院）
「アジア各国のソーシャル・ウェルビーイング研究」
Emma Porio　（アテネオ・デ・マニラ大学）
Surichai Wun'gaeo　（チュラロンコン大学、平和・紛争研究所所長）
Paulus Wirutomo, Iwan Gardono Sudjatmiko　（インドネシア大学）
Yin Yue　（上海財経大学）
パネルディスカッション
閉会の挨拶
Surichai Wun'gaeo　（チュラロンコン大学、平和・紛争研究所所長）

（様式1）

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

■第 1 回国際コンファレンス
テーマ：ソーシャル・ウェルビーイングとアジアにおける持続可能な開発目標
Social Well-being and Sustainable Development Goals in Asia
日時　平成 29 年 3 月 9 日（木）　9:00 – 17:00
平成 29 年 3 月 10 日（金）　9:00 – 16:30
場所　タイ、チュラロンコン大学
参加者〈3 月 9 日（木)〉

Opening Remarks
Prapart Pintobtang（チュラロンコン大学）

Reports on 2016 Social Well-being Survey in Thailand
Surangrut Jumnianpol（チュラロンコン大学）

Social Well-being in the Philippines: Indicators and Patterns
Emma Porio, Justin Charles G. See（アテネオ・デ・マニラ大学）

Quantitative Analyses of SWB Surveys in Japan, Korea, and Vietnam
Jaeyeol Yee（ソウル国立大学）
Seokho KIM（ソウル国立大学）
飯沼健子（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター研究員・経済学部教授）

Social Well-being and SDGs in Southeast Asia
Francisia SSE Seda（インドネシア大学）
稲田十一（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター研究員・経済学部教授）
Paulus Wirutomo（インドネシア大学）
Daisy Indira Jasmine（インドネシア大学）
Riena Julianisa（インドネシア大学）

Closing Remark
原田博夫（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター代表・経済学部教授）

〈3 月 10 日（金)〉

Opening Remarks
President（Chulalongkorn University）

Keynote Address I: From SDGs to Social Wellbeing: Policy-Knowledge Linkages
Hans van Willenswaard（School for Wellbeing Studies and Research）

Keynote Address II: (video)
吉野直行（アジア開発銀行研究所所長，慶応大学名誉教授）

SDGs and Well-being in East and Southeast Asia: Engaging Stakeholders
Emma Porio（Ateneo de Manila University）
Iwan Gardono Sudjatmiko（University of Indonesia）
Ganda Upaya（University of Indonesia）
Indera Pattinasarany（University of Indonesia）
Jauharul Anwar（University of Indonesia）
Adrianus Jebatu（University of Indonesia）
Surya Adiputra（University of Indonesia）
Marco Roncarati（Social Development Division, UNESCAP）
Victor Karunan（UNICEF Malaysia）

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

Keynote Address III: From Wealth to Well-being: Economics as if Life Mattered
Apichai Puntasen（Rangsit University and Thailand Rural Reconstruction Movement: Foundation under Royal Patronage）

Well-being and SDGs, Death and Well-being: Connections and linkages
嶋根克己（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター研究員・人間科学部教授）
Pavika Sriratanaban（Chulalongkorn University）
Narumon Hinshiranan（Chulalongkorn University）

Social Well-being and Multi-level Learning in East and Southeast Asia
原田博夫（ソーシャル・ウェルビーイング研究センター代表・経済学部教授）
Surichai Wun'gaeo（Chulalongkorn University）

Closing Remark
Amara Pongsapich（Chulalongkorn University）

Ⅱ．刊行物

【平成 26 年度】
■「ソーシャル・ウェルビーイング研究論集」第 1 号　平成 27 年 3 月・全 190 頁
■「*The Senshu Social Well-being Review*」No.1　平成 27 年 3 月・全 199 頁

【平成 27 年度】
■「ソーシャル・ウェルビーイング研究論集」第 2 号　平成 28 年 3 月・全 108 頁
■「*The Senshu Social Well-being Review*」No.2　平成 28 年 3 月・全 111 頁

【平成 28 年度】
■「ソーシャル・ウェルビーイング研究論集」第 3 号　平成 29 年 3 月・全 107 頁
■「*The Senshu Social Well-being Review*」No.3　平成 28 年 9 月・全 181 頁

Ⅲ.インターネットでの公開状況

【ソーシャル・ウェルビーイング研究センターURL】
http://www.senshu-u.ac.jp/swb/index.html

＜これから実施する予定のもの＞

Ⅰ．シンポジウム・コンファレンス

【平成 29 年度】

■第 2 回国際コンファレンス
日時　平成 29 年　10 月　12 日（木）・13 日（金）
場所　ベトナム、ハノイ　・　ベトナム社会科学院

■第 3 回国際コンファレンス
日時　平成 30 年　2 月
場所　インドネシア、バリ島

【平成 30 年度】

■第 4 回国際コンファレンス
日時　平成 30 年　秋
場所　韓国、ソウル

■第 4 回シンポジウム
日時　平成 30 年　晩秋
場所　東京

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

Ⅱ．刊行物
【平成 29 年度】
■「ソーシャル・ウェルビーイング研究論集」第 4 号　平成 30 年 3 月
■「*The Senshu Social Well-being Review*」No.4　平成 29 年 10 月

【平成 30 年度】
■「ソーシャル・ウェルビーイング研究論集」第 5 号　平成 31 年 3 月
■「*The Senshu Social Well-being Review*」No.5　平成 30 年 12 月

14 その他の研究成果等

「12 研究発表の状況」で記述した論文、学会発表等以外の研究成果及び企業との連携実績があれば具体的に記入してください。 また、上記11(4)に記載した研究成果に対応するものには＊を付してください。

《研究会》
【平成 26 年度】
■第 1 回研究会
日時：　平成 26 年 8 月 8 日（金）13:30～16:00
場所：　専修大学生田校舎　社会知性開発研究センター
担当：　原田博夫
出席者：　飯沼健子、金井雅之、神原理、嶋根克己、田中康裕、宮川英一
内容：　社会意識（アンケート）調査の狙いと具体的な調査項目・事項の再設定に向けて：社会関係資本研究センターで実施済みのアンケート調査設問・項目（日本語・英語・現地語）の突き合わせ・対応の確認

■第 2 回研究会
日時：　平成 26 年 8 月 20 日（水）13:30～16:00
場所：　専修大学生田校舎　社会知性開発研究センター
担当：　原田博夫
出席者：　飯沼健子、稲田十一、大橋英夫、大矢根淳、嶋根克己、丸茂雄一、村上俊介、宮川英一
内容：　社会意識（アンケート）調査の狙いと具体的な調査項目・事項の再設定に向けて：新たな項目の導入と削除項目洗い出し（第 1 回）

■第 3 回研究会
日時：　平成 26 年 9 月 19 日（金）13:30～16:00
場所：　専修大学生田校舎　社会知性開発研究センター
担当：　原田博夫
出席者：　稲田十一、大橋英夫、大矢根淳、丸茂雄一、村上俊介、宮川英一
内容：　社会意識（アンケート）調査の狙いと具体的な調査項目・事項の再設定に向けて：新たな項目の導入と削除項目洗い出し（第 2 回）

■第 4 回研究会
日時：　平成 26 年 10 月 3 日（金）14:30～17:00
場所：　専修大学生田校舎 6 号館　612 教室
講師：　金井雅之
担当：　原田博夫
出席者：　飯沼健子、嶋根克己、村上俊介、宮川英一、矢崎慶太郎
内容：　ソーシャル・ウェルビーイング研究の課題

■第 5 回研究会
日時：　平成 26 年 10 月 17 日（金）13:30～15:30

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

場所：　専修大学生田校舎 6 号館　612 教室
担当：　原田博夫
出席者：　飯沼健子、大矢根淳、金井雅之、神原理、嶋根克己、鈴木奈穂美、
丸茂雄一、宮川英一、矢崎慶太郎
内容：　調査票作成について

■第 6 回研究会
日時：　平成 26 年 11 月 14 日（金）13:00～17:30
場所：　専修大学生田校舎 6 号館　612 教室
担当：　原田博夫
出席者：　飯沼健子、大矢根淳、金井雅之、神原理、嶋根克己、鈴木奈穂美、
丸茂雄一、宮川英一、矢崎慶太郎
内容：　調査票作成について

■第 7 回研究会
日時：　平成 26 年 11 月 19 日（水）10:50～13:00
場所：　専修大学生田校舎 6 号館　612 教室
担当：　原田博夫
出席者：　飯沼健子、大矢根淳、金井雅之、丸茂雄一、村上俊介、宮川英一、
矢崎慶太郎
内容：　調査票作成について

■第 8 回研究会
日時：　平成 27 年 1 月 7 日（水）13:00～14:30
場所：　専修大学生田校舎 6 号館　612 教室
担当：　原田博夫
出席者：　金井雅之、嶋根克己、田中康裕、丸茂雄一、宮川英一、矢崎慶太郎
内容：　調査票作成について

■第 9 回研究会
日時：　平成 27 年 3 月 19 日（木）14：00～17：00
場所：　専修大学生田校舎 10 号館　ゼミ 105E
講師：　鷲見英司、金井雅之
出席者：　原田博夫、大橋英夫、村上俊介、神原理、大矢根淳、丸茂雄一、田中康裕、
宮川英一、矢崎慶太郎
内容：　鷲見英司氏の研究発表および金井研究員による調査結果の記述統計概要の発表

【平成 27 年度】
■第 10 回研究会
日時：　平成 27 年 5 月 14 日（木）10：45～12：30
場所：　専修大学生田校舎 6 号館　611 教室
講師：　原田博夫
出席者：　飯沼健子、大矢根淳、金井雅之、嶋根克己、丸茂雄一、田中康裕、
宮川英一、矢崎慶太郎
内容：　海外における調査準備の経過とデータの利用条件の設定

■第 11 回研究会
日時：　平成 27 年 6 月 19 日（金）15：00～17：00
場所：　専修大学生田校舎 10 号館　ゼミ 105V
講師：　矢澤修次郎（一橋大学、成城大学名誉教授）
出席者：　原田博夫、金井雅之、飯沼健子、神原理、大矢根淳、嶋根克己、丸茂雄一、
田中康裕、中村知子、矢崎慶太郎
内容：　「東アジア・東南アジアの社会学者とのネットワーキング」

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

■第 12 回研究会
日時：　平成 27 年 7 月 28 日（火）13：00～17：15
場所：　専修大学生田校舎 10 号館　ゼミ 105S
講師：　稲田十一、飯沼健子、中村知子、徐一睿
出席者：　原田博夫、大橋英夫、金井雅之、丸茂雄一、田中康裕、矢崎慶太郎
内容：　アジア地域の社会状況についての研究報告

■第 13 回研究会
日時：　平成 27 年 12 月 4 日（金）13：00～15：30
場所：　専修大学生田校舎 10 号館　ゼミ 105K
講師：　山本耕資、大崎裕子
出席者：　原田博夫、金井雅之、飯沼健子、丸茂雄一、嶋根克己、神原理、宮川英一、矢崎慶太郎
内容：　山本耕資「所得平等化政策に関する選好の計測と分析」
大崎裕子「現代社会における一般的信頼の規定要因と帰結」

【平成 28 年度】
■第 14 回研究会
日時：　平成 28 年 10 月 21 日（金）13：50～14：30
場所：　専修大学生田校舎 6 号館　612 教室
報告者：　金井雅之
出席者：　原田博夫、飯沼健子、大崎裕子、大矢根淳、金井雅之、神原理、嶋根克己、鈴木奈穂美、丸茂雄一、矢崎慶太郎
内容：　金井雅之　「SWB 日本調査のこれまでの分析の概要と今後の方向性」

■第 15 回研究会
日時：　平成 28 年 11 月 11 日（金）13：00～14：30
場所：　専修大学生田校舎 6 号館　612 教室
報告者：　神原理、鈴木奈穂美
出席者：　原田博夫、大矢根淳、金井雅之、神原理、嶋根克己、鈴木奈穂美、丸茂雄一、山本耕資、矢崎慶太郎
内容：　神原理　「SWB 日本調査 2015 の分析結果―地域生活と幸福度との関係から―」
鈴木奈穂美　「SWB 日本調査に見る介護者の主観的幸福度・満足度」

■第 16 回研究会
日時：　平成 28 年 12 月 2 日（金）14：00～16：00
場所：　専修大学生田校舎 6 号館　612 教室
報告者：　嶋根克己、Steven Lim
出席者：　原田博夫、飯沼健子、金井雅之、嶋根克己、鈴木奈穂美、丸茂雄一、Steven Lim、矢崎慶太郎
内容：　嶋根克己　「死者のつながりとソーシャル・ウェルビーイング」
Steven Lim（経済学部、海外客員教授）
「Happiness & Older People: Reinterpreting Relative Income」

■第 17 回研究会
日時：　平成 29 年 1 月 27 日（金）13：30～15：00
場所：　専修大学生田校舎 6 号館　623 教室
報告者：　大崎裕子、山本耕資
出席者：　原田博夫、金井雅之、嶋根克己、大崎裕子、山本耕資、矢崎慶太郎
内容：　大崎裕子　「信頼と生活満足の関係に関する国際比較」
山本耕資　「政策選好の分析：主観的幸福とソーシャル・ウェルビーイングをめぐって」

（様式1）

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

15 「選定時」に付された留意事項とそれへの対応

＜「選定時」に付された留意事項＞

該当無し

＜「選定時」に付された留意事項への対応＞

該当無し

（様式1）

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

16 施設・装置・設備・研究費の支出状況（実績概要）

（千円）

年度・区分		支出額	内訳						備考
			法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他（　　）	
平成26年度	施設	0							
	装置	0							
	設備	0							
	研究費	19,565	12,766	6,799					
平成27年度	施設	0							
	装置	0							
	設備	0							
	研究費	20,972	13,115	7,857					
平成28年度	施設	0							
	装置	0							
	設備	0							
	研究費	21,808	17,368	4,440					
総額	施設	0	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	0	
	設備	0	0	0	0	0	0	0	
	研究費	62,345	43,249	19,096	0	0	0	0	
総計		62,345	43,249	19,096	0	0	0	0	

17 施設・装置・設備の整備状況 （私学助成を受けたものはすべて記載してください。）

《施　設》（私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。）

（千円）

施設の名称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
社会知性開発研究センター事務課		93 ㎡	1	19 名			
社会知性開発研究センター2		24 ㎡	1	19 名			

※ 私学助成による補助事業として行った新増築により、整備前と比較して増加した面積

＿＿＿＿＿＿＿＿㎡

（様式1）

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

《装置・設備》（私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。）　（千円）

装置・設備の名称	整備年度	型　番	台　数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
（研究装置）							
				h			
				h			
				h			
				h			
				h			
（研究設備）							
				h			
				h			
				h			
				h			
				h			
（情報処理関係設備）							
				h			
				h			
				h			
				h			
				h			

18 研究費の支出状況　（千円）

年　度	平成　26　年度			
小 科 目	支 出 額	積　算　内　訳		
		主 な 使 途	金　額	主　な　内　容
教　育　研　究　経　費　支　出				
消 耗 品 費	1,313	消耗品、コピー代等	1,313	消耗品、コピー、参考資料　他
光 熱 水 費	0		0	
通信運搬費	85	郵送料等	85	資料・年報送付　他
印刷製本費	1,832	印刷費等	1,832	名刺、行事案内、論集等
旅費交通費	3,927	国内・海外出張等	3,927	国内・海外出張、招聘講師旅費　他
賃借料	0		0	
報酬・委託料	5,758	委託・謝礼費等	5,758	調査委託、翻訳、シンポジウム講師謝礼　他
準備品費	567	OA機器等	567	パソコン等
諸会費	268	学会	268	学会参加費　他
雑費	432		432	
計	14,182		14,182	
ア　ル　バ　イ　ト　関　係　支　出				
人件費支出	6		6	時給1,100円，年間時間数6時間
（兼務職員）	1,584		1,584	実人数　1名
教育研究経費支出	0		0	
計	1,590		1,590	
設 備 関 係 支 出（1個又は1組の価格が500万円未満のもの）				
教育研究用機器備品	1,460		1,460	
図　書	0		0	
計	1,460		1,460	
研　究　ス　タ　ッ　フ　関　係　支　出				
リサーチ・アシスタント	1,000		1,000	学内1名
ポスト・ドクター	1,333		1,333	学内1名
研究支援推進経費	0		0	
計	2,333		2,333	

（様式1）

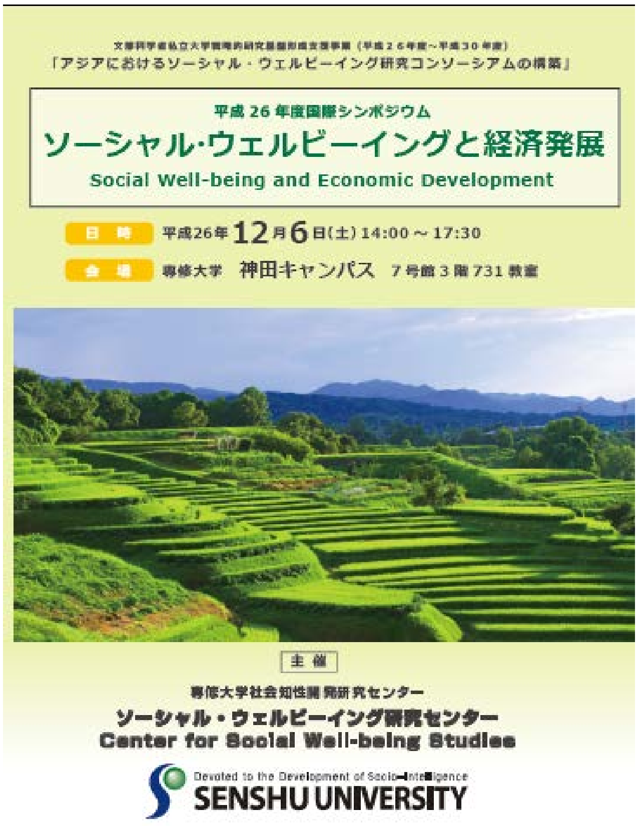
法人番号	131039
プロジェクト番号	S1491003

年　度	平成　27　年度			
小 科 目	支 出 額	積　算　内　訳		
		主 な 使 途	金　額	主　な　内　容
教　育　研　究　経　費　支　出				
消 耗 品 費	949	消耗品、コピー代等	949	消耗品、コピー、参考資料　他
光 熱 水 費	0		0	
通信運搬費	171	郵送料等	171	資料・論集送付、行事案内　他
印刷製本費	1,135	印刷費等	1,135	名刺、行事案内、論集等
旅費交通費	2,596	国内・海外出張等	2,596	国内・海外出張、招聘講師旅費　他
賃借料	0		0	
報酬・委託料	9,351	委託・謝礼費等	9,351	調査委託、翻訳、シンポジウム講師謝礼　他
準備品費	273	OA機器等	273	パソコン、プリンタ
諸会費	399	学会	399	学会参加費　他
雑費	829		829	
計	15,703		15,703	
ア　ル　バ　イ　ト　関　係　支　出				
人件費支出	14		14	時給1,100円，年間時間数13時間
（兼務職員）	3,040		3,040	実人数　1名
教育研究経費支出	0		0	
計	3,054		3,054	
設 備 関 係 支 出（1個又は1組の価格が500万円未満のもの）				
教育研究用機器備品	215		215	
図　書	0		0	
計	215		215	
研　究　ス　タ　ッ　フ　関　係　支　出				
リサーチ・アシスタント	0		0	
ポスト・ドクター	2,000		2,000	学内1名
研究支援推進経費	0		0	
計	2,000		2,000	

年　度	平成　28　年度			
小 科 目	支 出 額	積　算　内　訳		
		主 な 使 途	金　額	主　な　内　容
教　育　研　究　経　費　支　出				
消 耗 品 費	310	消耗品、コピー代等	310	消耗品、コピー、参考資料　他
光 熱 水 費	0		0	
通信運搬費	283	郵送料等	283	資料・論集送付、行事案内
印刷製本費	1,548	印刷費等	1,548	名刺、リーフレット、論集等
旅費交通費	4,829	国内・海外出張等	4,829	国内・海外出張、招聘講師旅費　他
賃借料	54	賃借料等	54	シンポジウム同時通訳機器レンタル
報酬・委託料	9,230	委託・謝礼費等	9,230	シンポジウム講師謝礼、翻訳　他
準備品費	0		0	
諸会費	408	学会	408	学会参加費　他
雑費	127		127	
計	16,789		16,789	
ア　ル　バ　イ　ト　関　係　支　出				
人件費支出	0		0	
（兼務職員）	3,019		3,019	実人数　1名
教育研究経費支出	0		0	
計	3,019		3,019	
設 備 関 係 支 出（1個又は1組の価格が500万円未満のもの）				
教育研究用機器備品	0		0	
図　書	0		0	
計	0		0	
研　究　ス　タ　ッ　フ　関　係　支　出				
リサーチ・アシスタント	0		0	
ポスト・ドクター	2,000		2,000	学内1名
研究支援推進経費	0		0	
計	2,000		2,000	

【別添資料】シンポジウム・コンファレンス

第１回シンポジウム　平成 26 年 12 月 6 日（土）



第２回シンポジウム　平成 27 年 11 月 28 日（土）

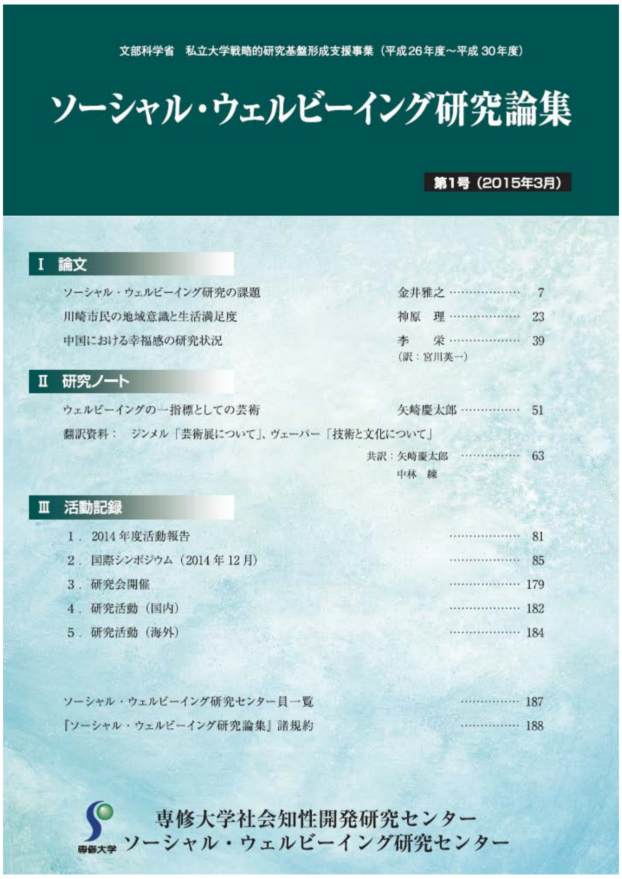
第３回シンポジウム　平成 28 年 6 月 25 日（土）

第１回国際コンファレンス
　平成 29 年 3 月 9 日（木）・3 月 10 日（金）

【別添資料】刊行物

日本語論集『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』

＜No.1, 2015 年 3 月＞


文部科学省　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成26年度～平成30年度）

ソーシャル・ウェルビーイング研究論集

第1号（2015年3月）

Ⅰ 論文
ソーシャル・ウェルビーイング研究の課題　金井雅之 ……… 7
川崎市民の地域意識と生活満足度　神原　理 ……… 23
中国における幸福感の研究状況　李　栄 ……… 39（訳：宮川英一）

Ⅱ 研究ノート
ウェルビーイングの一指標としての芸術　矢崎慶太郎 ……… 51
翻訳資料：　ジンメル「芸術展について」、ヴェーバー「技術と文化について」　共訳：矢崎慶太郎　中林　稜 ……… 63

Ⅲ 活動記録
1．2014 年度活動報告 ……… 81
2．国際シンポジウム（2014 年 12 月） ……… 85
3．研究会開催 ……… 179
4．研究活動（国内） ……… 182
5．研究活動（海外） ……… 184

ソーシャル・ウェルビーイング研究センター員一覧 ……… 187
『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』諸規約 ……… 188

専修大学社会知性開発研究センター
ソーシャル・ウェルビーイング研究センター

ISBN：978-4-9908234-0-5

MEXT-Supported Program for the Strategic Research Foundation at Private Universities (2014－2018)

The Journal of Social Well-being Studies

No.1 (March 2015)

Ⅰ Articles
A Review and Agenda for Social Well-being Reserach　Masayuki Kanai ……… 7
Community Awareness and Life Satisfaction of Citizens in Kawasaki-City　Satoshi Kambara ……… 23
Research Activities on Well-being in China　Li Long ……… 39　translator: Hidekazu Miyagawa

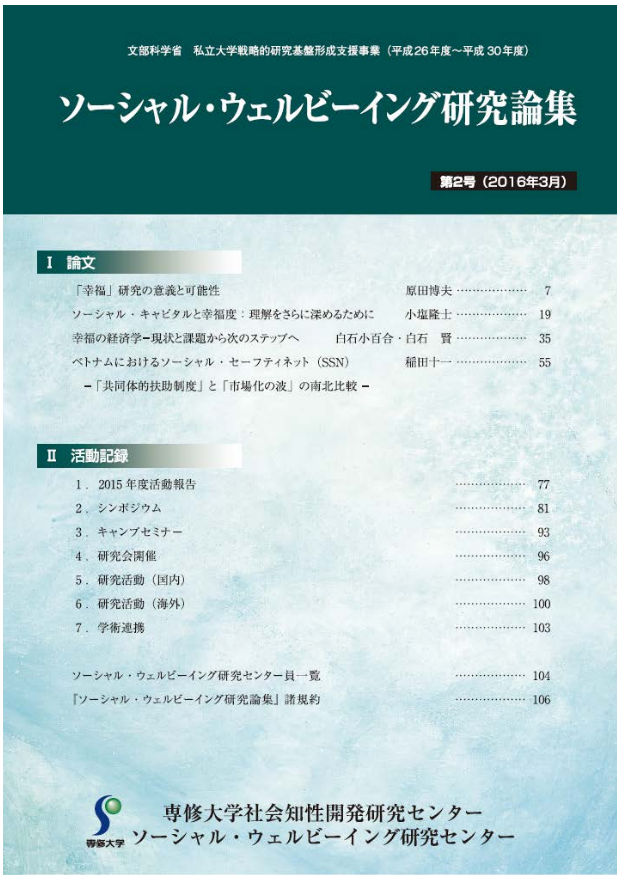
Ⅱ Research Notes
Modern Art as a Measure of Well-being　Keitaro Yazaki ……… 51
Translation: G. Simmel "On Art Exhibitions", M. Weber "Remarks on Technology and Culture"　translators: Keitaro Yazaki, Ren Nakabayashi ……… 63

Ⅲ Annual Report
1．Annual Report 2014 ……… 81
2．International Symposium 2014 ……… 85
3．Records of Research Seminar ……… 179
4．Research Activities in Japan ……… 182
5．Research Activities on abroad ……… 184

List of Researchers ……… 187
Editorial Policy ……… 188

Center for Social Well-being Studies
Institute for the Development of Social Intelligence
SENSHU UNIVERSITY

＜No.2, 2016 年 3 月＞


文部科学省　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成26年度～平成30年度）

ソーシャル・ウェルビーイング研究論集

第2号（2016年3月）

Ⅰ 論文
「幸福」研究の意義と可能性　原田博夫 ……… 7
ソーシャル・キャピタルと幸福度：理解をさらに深めるために　小塩隆士 ……… 19
幸福の経済学－現状と課題から次のステップへ　白石小百合・白石　賢 ……… 35
ベトナムにおけるソーシャル・セーフティネット（SSN）　稲田十一 ……… 55
－「共同体的扶助制度」と「市場化の波」の南北比較－

Ⅱ 活動記録
1．2015 年度活動報告 ……… 77
2．シンポジウム ……… 81
3．キャンプセミナー ……… 93
4．研究会開催 ……… 96
5．研究活動（国内） ……… 98
6．研究活動（海外） ……… 100
7．学術連携 ……… 103

ソーシャル・ウェルビーイング研究センター員一覧 ……… 104
『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』諸規約 ……… 106

専修大学社会知性開発研究センター
ソーシャル・ウェルビーイング研究センター

ISBN：978-4-9908234-2-9

MEXT-Supported Program for the Strategic Research Foundation at Private Universities (2014－2018)

The Journal of Social Well-being Studies

No.2 (March 2016)

Ⅰ Articles
The Significance and Availability of 'Happiness' Study　Hiroo Harada ……… 7
Social capital and perceived happiness: Some evidence and issues　Takashi Oshio ……… 19
Happiness of Economics －Current Condition and Challenges for the Future　Sayuri Shiraishi, Ken Shiraishi ……… 35
Social Safety net(SSN) in Vietnam: Comparative analysis of two villages in the north and south in terms of community-based social safety net and The market economy wave　Juichi Inada ……… 55

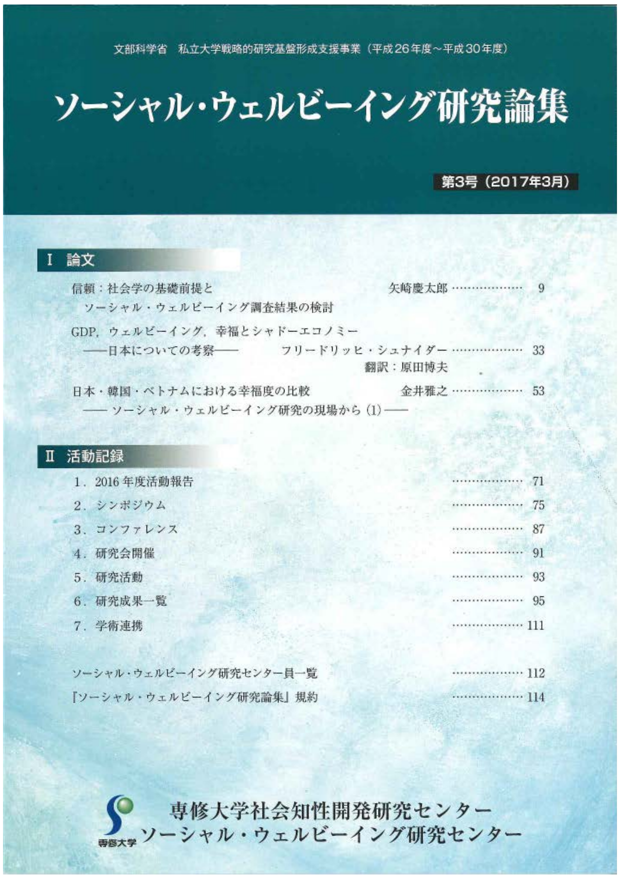
Ⅱ Annual Report
1．Annual Report 2015 ……… 77
2．Symposium 2015 ……… 81
3．Camp Seminar ……… 93
4．Records of Research Seminar ……… 96
5．Research Activities in Japan ……… 98
6．Research Activities on abroad ……… 100
7．Academic Cooperation ……… 103

List of Researchers ……… 104
Editorial Policy ……… 106

Center for Social Well-being Studies
Institute for the Development of Social Intelligence
SENSHU UNIVERSITY

【別添資料】刊行物

＜No.3, 2017 年 3 月＞



文部科学省　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成26年度～平成30年度）

ソーシャル・ウェルビーイング研究論集

第3号（2017年3月）

Ⅰ　論文

信頼：社会学の基礎前提と　ソーシャル・ウェルビーイング調査結果の検討　矢崎慶太郎 …… 9

GDP，ウェルビーイング，幸福とシャドーエコノミー　——日本についての考察——　フリードリッヒ・シュナイダー …… 33　翻訳：原田博夫

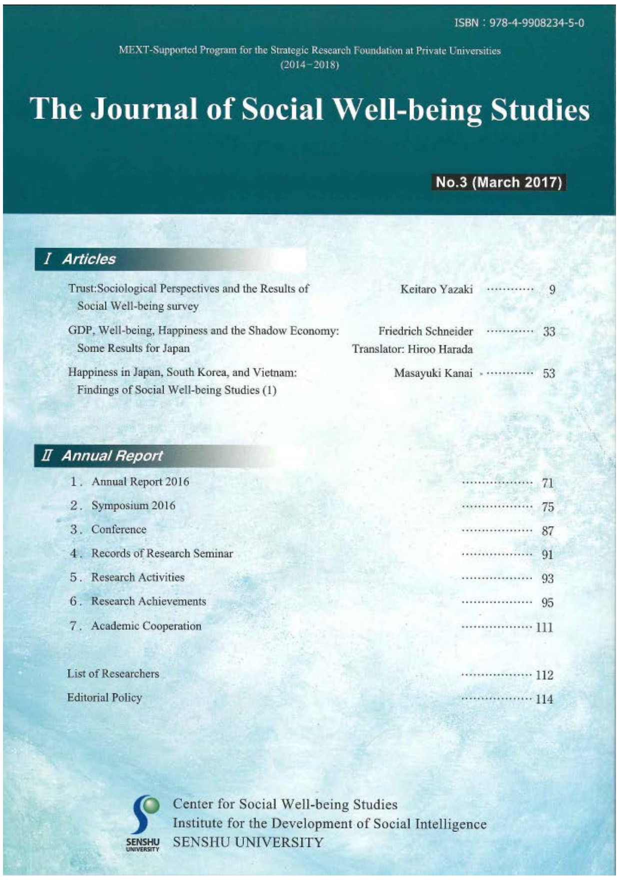
日本・韓国・ベトナムにおける幸福度の比較　——ソーシャル・ウェルビーイング研究の現場から（1）——　金井雅之 …… 53

Ⅱ　活動記録

1．2016 年度活動報告 …… 71
2．シンポジウム …… 75
3．コンファレンス …… 87
4．研究会開催 …… 91
5．研究活動 …… 93
6．研究成果一覧 …… 95
7．学術連携 …… 111

ソーシャル・ウェルビーイング研究センター員一覧 …… 112
『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』規約 …… 114

専修大学社会知性開発研究センター
ソーシャル・ウェルビーイング研究センター



ISBN：978-4-9908234-5-0

MEXT-Supported Program for the Strategic Research Foundation at Private Universities (2014－2018)

The Journal of Social Well-being Studies

No.3 (March 2017)

Ⅰ Articles

Trust:Sociological Perspectives and the Results of Social Well-being survey　Keitaro Yazaki …… 9

GDP, Well-being, Happiness and the Shadow Economy: Some Results for Japan　Friedrich Schneider　Translator: Hiroo Harada …… 33

Happiness in Japan, South Korea, and Vietnam: Findings of Social Well-being Studies (1)　Masayuki Kanai …… 53

Ⅱ Annual Report

1．Annual Report 2016 …… 71
2．Symposium 2016 …… 75
3．Conference …… 87
4．Records of Research Seminar …… 91
5．Research Activities …… 93
6．Research Achievements …… 95
7．Academic Cooperation …… 111

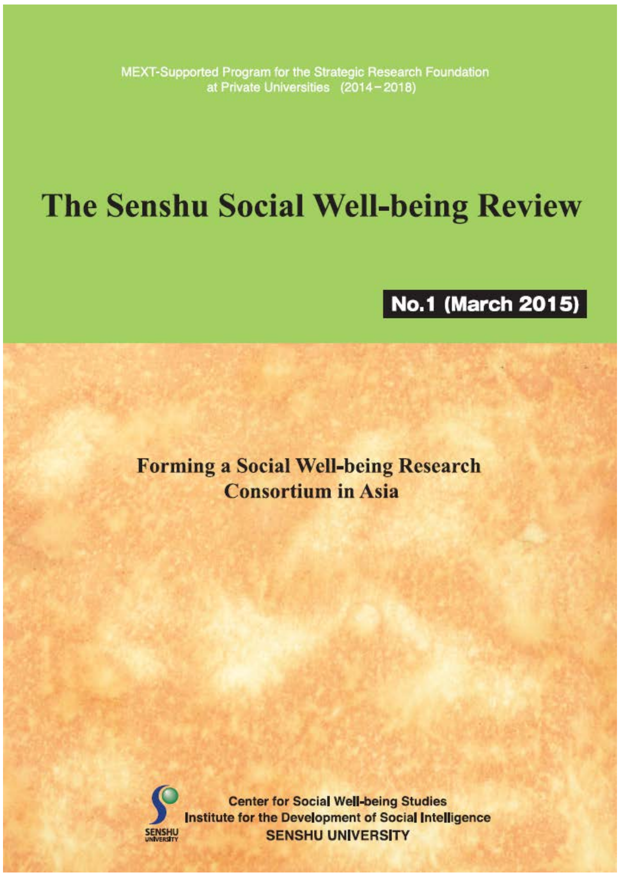
List of Researchers …… 112
Editorial Policy …… 114

Center for Social Well-being Studies
Institute for the Development of Social Intelligence
SENSHU UNIVERSITY

【別添資料】刊行物

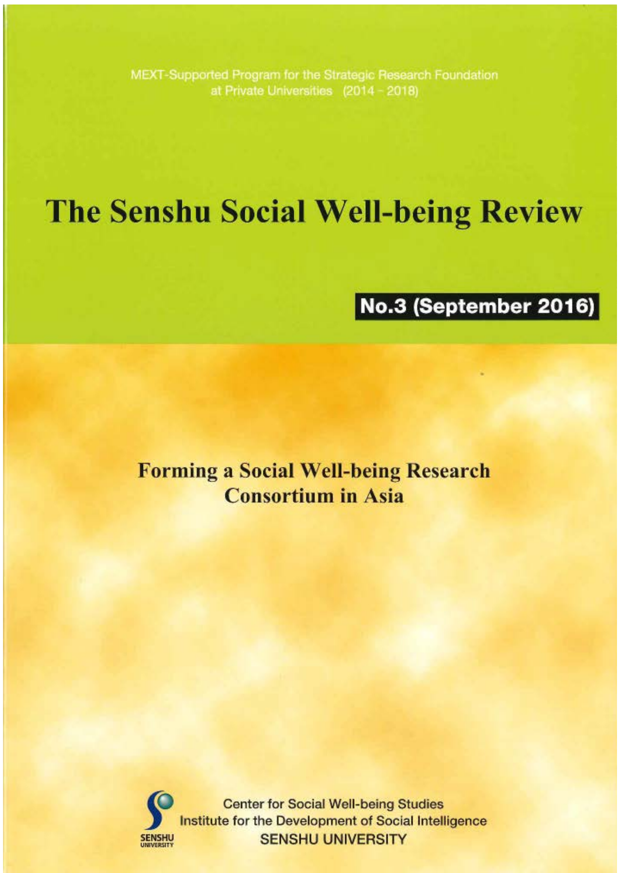
英語論集　*The Senshu Social Well-being Review*

＜No.1, March 2015＞



＜No.2, March 2016＞

＜No.3, September 2016＞



文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

『アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの構築』に係る研究進捗状況評価票

大学名	選定年度	研究プロジェクトの主体となる研究組織名	研究代表者
専修大学	平成26年度	専修大学社会知性開発研究センター ソーシャル・ウェルビーイング研究センター	原田　博夫
研究プロジェクト名		アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの構築	

評価項目		評価
研究組織	各研究者の役割分担や責任体制の明確さ、参加する研究者の人数、PD及びRAの活用状況、研究支援体制	研究代表者のリーダーシップが発揮されているため、責任体制と各研究者の役割分担が明確であり、参加する研究者の人数も適正である。PDとRAも活用し若手研究者の養成もはかっており、大学からの支援も適正である。
	共同研究機関等との連携状況	東アジアおよび東南アジア7か国,それぞれの地域で高い評価を受けている研究機関と調査・研究を実施し、現地での国際コンフェレンスも実施して、実効性の高い研究コンソーシアムを構築している。
進捗状況・研究成果等	現在までの進捗状況及び達成度	「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」を日本、韓国、ベトナムフィリピン、タイで実施済みであり、さらにインドネシア、台湾で実施予定であり、基本的なオリジナルデータを着実に収集・蓄積している。
	特に優れた研究成果	短期間に独自のアンケート調査を日本を含む5か国で実施済みであり、全体では海外における研究機関との国際コンソーシアムを構築した点は高く評価できる。
	問題点とその克服方法	予算の制約から調査のサンプル数が小さく、国際コンソーシアム参加国内での調査地点の地域特性を反映するには困難が伴うが、現地での国際コンフェランスや聞き取り調査で補完しつつある。
	研究成果の副次的効果	国際的な研究プラットフォームがすでに形成され、それに基づき、より広範な研究についての意見交換がなされるようになった
	今後の研究方針	29年度もインドネシア・台湾で調査実施予定であり、適正である。
	今後期待される研究成果	本プロジェクトで構築した研究コンソーシアムを広く外部・グルーバルに公開していくことを検討中である点は高く評価できる。
	自己評価の実施結果及び対応状況	本プロジェクトの長所と短所を的確に自己評価しており、かつプロジェクト期間の終了後のコンソーシアムとジャーナルの継続法まで検討している。
研究発表の状況	雑誌論文・図書	独自のジャーナルを邦文と英文2種類発行し、かつ両者を差別化しており、一部で研究メンバー以外の投稿も受け入れており妥当である。
	学会発表	基礎データを収集中の段階としては十分な学会発表を実施している。
研究成果の公開状況	シンポジウム・学会実施状況	研究成果を議論するための十分な公開の場を提供している。
	インターネットの公開状況	同上

総合所見*（　A　　）

アンケート調査を作成しそれを5か国において実施し、さらに2か国において実施予定である点、その過程で7か国の研究機関との国際コンソーシアムを構築した点、研究成果を発信するためのコンフェランス、邦文英文2種類のジャーナルを発行している点、いずれも高く評価できる。

* A（目標を大きく上回っている）、B（目標を達成している）、C（目標を下回っている or 達成していない）

平成２９年　３月　５日

評価者氏名　稲葉　陽二　　　　　　　　印

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

『アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの構築』に係る研究進捗状況評価票

大学名	選定年度	研究プロジェクトの主体となる研究組織名	研究代表者
専修大学	平成26年度	専修大学社会知性開発研究センター ソーシャル・ウェルビーイング研究センター	原田　博夫
研究プロジェクト名		アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの構築	

評価項目		評価
研究組織	各研究者の役割分担や責任体制の明確さ、参加する研究者の人数、PD及びRAの活用状況、研究支援体制	参加メンバーの役割分担や責任体制は明確であり、社会知性開発研究センターによる専修大学の研究支援体制も充実している。研究組織として効率的に運営されていると判断できる。
	共同研究機関等との連携状況	韓国、台湾、ベトナム、タイ、フィリピン、インドネシアのトップクラスの研究機関とコンソーシアムを構築し、国際協力体制の下で研究を推進している。
進捗状況・研究成果等	現在までの進捗状況及び達成度	研究プロジェクトを着実に推進していて、達成度は期待以上である。
	特に優れた研究成果	まだすべての参加国での調査データが出来上がっていないので、データ分析に基づいた国際比較分析については優れた研究成果は出ていない。しかし今後に大いに期待できる。
	問題点とその克服方法	各国における調査設計が異なるので、比較分析をする際に注意する必要がある。このことについては台湾・中央研究院調査研究センターの助言を得るのが望ましい。
	研究成果の副次的効果	この点も調査データが出来上がってからの国際比較分析に期待したい。
	今後の研究方針	今までも効率的な組織運営をしてきたので、このまま研究を推進していただきたい。
	今後期待される研究成果	東アジアと東南アジアを対象とすることで、従来の（欧米中心の）研究では見えていなかったこと、そしてそれが普遍性を持つことの発見とそれに基づいた理論的進展を期待する。
	自己評価の実施結果及び対応状況	自らの問題点を的確に認識し、真摯にそれらに対応しようとしている点は高く評価できる。
研究発表の状況	雑誌論文・図書	積極的に論文・図書を刊行している。しかし国際的に定評のある英文雑誌の論文はほとんどないので、今後はそのような雑誌への積極的な投稿を期待したい。
	学会発表	積極的に発表している点が高く評価できる。
研究成果の公開状況	シンポジウム・学会実施状況	よくオーガナイズされた国際シンポジウムやセミナーを行っていて、コンソーシアムを構築した効果が表れている。
	インターネットの公開状況	日本語と英語のホームページがあり、雑誌論文がダウンロード可能になっているなど、積極的に研究活動や成果を公開している。

総合所見* （ Ⓐ ・ B ・ C ）

コンソーシアムを構築し、国際協力体制の下で研究を推進している。すでに日本、韓国、ベトナム、フィリピン、タイで調査が行われていて、2017年春にインドネシアと台湾の調査が行われる予定である。これで研究対象となる国の調査データがすべて揃うので、本格的な国際比較分析が可能になる。短期間でアジアの卓越した研究機関とコンソーシアムを構築し、着実に調査を実施している点から、目標を大きく上回っていると判断できる。

ただし理論的研究については社会調査実施計画に比べて少し遅れていると言わざるを得ない。「研究進捗状況報告書の概要」において「東アジアおよび東南アジアを対象に、ソーシャル・ウェルビーイング研究を進めることは学術的にユニークである」と述べられているが、アジアのユニークさを強調しすぎると普遍的な認識には至らない。アジアを対象とすることで従来の研究では見えていなかったが普遍性を有する知見を得て、それに基づいて新たな理論を構築し、それを国際的雑誌で公表することを大いに期待する。

平成２９　年　２　月２３　日

評価者氏名　　佐藤嘉倫　　印

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

『アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの構築』に係る研究進捗状況評価票

大学名	選定年度	研究プロジェクトの主体となる研究組織名	研究代表者
専修大学	平成26年度	専修大学社会知性開発研究センター ソーシャル・ウェルビーイング研究センター	原田　博夫

研究プロジェクト名		アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの構築
評価項目		評価
研究組織	各研究者の役割分担や責任体制の明確さ、参加する研究者の人数、PD及びRAの活用状況、研究支援体制	参加者がかなりの多数に上る大規模な組織であるが役割分担及び責任体制が明確で、かつ有機的な連携を保っている。PDやRAなど、若手人材を研究支援として活用するとともに、人材育成を図っているようである。
	共同研究機関等との連携状況	研究コンソーシアム体制の中で、国内外の関連する研究機関・大学との広範な連携を展開している。
進捗状況・研究成果等	現在までの進捗状況及び達成度	既に国際比較調査を数か国で遂行しており、海外の機関と共催での国際コンフェランスも順次準備されている。これまでの経緯と平成29-30年度の計画の準備状況から見て、計画の目標は順調に達成されていると思われる。
	特に優れた研究成果	大規模国際比較調査、国際会議、論文集での成果発表等、優れた実績を示している。特に調査データ解析において、表層的な数字の取り扱いに陥らず、適切な尺度の観点からの慎重な解析が行われている。
	問題点とその克服方法	論文審査の問題点については適正な改善案が示されている。他方、平成27年にWEB調査が用いられているが、手法の効用と限界に配慮し、多様な調査モードでの並行比較実験調査などで普段の検証を続けていく必要がある。
	研究成果の副次的効果	本プロジェクは、「ソーシャルウェルビーイング」のテーマとするものであるが、人文社会学の他のテーマにおいても、大規模なコンソーシアムや国際連携を企画を意図する人々へ、参考事例を与えている。
	今後の研究方針	国際比較調査の結果の公表、国際会議の開催については計画の慎重に期待する。他方、各国の異なる調査環境の下で得られたデータの「国際比較可能性」については、十分に配慮が必要である。
	今後期待される研究成果	「アジアにおけるソーシャルウェルビーイング研究コンソーシアム」が確実に構築され、開かれた学術基盤としてさらなる発展をしていくことに期待する。
	自己評価の実施結果及び対応状況	各委員会で頻繁に事業活動の進行の確認をし、各年度末に自己点検評価報告書が作成されていて、綿密な自己評価プロセスが機能し、成果は高く評価されているようである。
研究発表の状況	雑誌論文・図書	既に多数の論文・著作・記事が発表されている。
	学会発表	国内外でかなり多数の学会発表がなされている。
研究成果の公開状況	シンポジウム・学会実施状況	主催、共催を含め、多数のシンポジウムが開催され、また各関連学会での研究成果の発表が行われている。
	インターネットの公開状況	同センターのホームページがあり、英文機関誌は専修大学学術機関リポジトリ（SI-Box）でもオンライン公開され、和文機関誌も無償でオンライン公開されている。

総合所見*（ (A) ・ B ・ C ）

人文社会学の分野では稀有の国際連携プロジェクトであり、当初計画が順調に進行し、論文・著作などの研究成果が上がっていることのみならず、国際的な研究コンソーシアムが構築されつつあるのが確認できる。目標を確実に達成しているが、結果として、本プロジェクトのテーマであるソーシャルウェルビーイングのみならず、人文社会学の他の分野のテーマに従事する研究者たちに対しても、国際連携の重要な具体例を提供していると評価できる。

＊A（目標を大きく上回っている）、B（目標を達成している）、C（目標を下回っている or 達成していない）

平成29年3月5日

評価者氏名　吉野諒三　印